

辺 路 石 南 遺 跡 五 反 地 遺 跡

—あけぼの道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999年9月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

平成6年から開始された“あけぼの道路敷設に係わる調査”に於きましては、長岡台地上を中心として調査を行ってまいりました。この結果、小籠遺跡、陣山遺跡、山田三ツ又遺跡等、弥生時代から近世にわたる先人の生活を明らかにすることができました。今回報告致します辺路石南遺跡及び五反地遺跡の調査でも近世を中心とした遺構や遺物が発見されております。また、五反地遺跡では調査区の一部に道路遺構が認められ、轍が残されておりました。情報化社会と呼ばれる今日でも道は人々の暮らしと不可分であります。歴史の各場面で登場する道、それらもただ単に空間的な意味を持つだけのものではなく、当時の社会の凝縮された姿だと考えます。

調査に際しましては、周辺住民の方々にご協力を頂きましたことを感謝いたします。特に、辺路石南遺跡の調査に於きましては調査区に隣接する(有)坂本製材所の過分なるご配慮を頂きましたこと、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

1999年9月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 河崎 正幸

例 言

1. 本書は、国道195号線バイパス（通称あけぼの道路）敷設工事に伴う「辺路石南遺跡」及び「五反地遺跡」の発掘調査報告書である。発掘調査は1995年と1996年に実施されており、『辺路石南遺跡・五反地遺跡』との書名を冠する。
2. 辺路石南遺跡は、高知県南国市下末松字高屋ノ西449他 に所在する。また、五反地遺跡は高知県南国市上末松字五反地に所在する。両遺跡は今回の調査までに本格的な調査の実施は無く、散布地として登録されていた遺跡である。
3. 辺路石南遺跡
 - 調査面積は、1,040m²である。
 - 調査期間は、1995年5月30日から同年6月7日まで実施した。五反地遺跡
 - 調査面積は、5,583m²である。
 - 調査期間は、1996年4月22日から同年8月22日まで実施した。
4. 発掘調査は、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが、高知県南国土木事務所の委託を受けて実施した。発掘業務は、出原恵三（埋蔵文化財センター調査第三係長）の指導のもとに、佐竹寛（同 専門調査員）、浜田恵子（同 主任調査員）、藤方正治（同 調査員）が担当し、事務は吉岡利一（同 主幹）、大原裕幸（同 主幹）が行った。
5. 本書の執筆・編集は藤方正治が行った。
6. 調査及び本書作成時には以下の諸氏の協力を得た。紙面を借りて厚くお礼を述べたい。
 - 〈調査作業〉
小松栄一、小松好、小松木義、小松浜子、小松雪子、小倉功、小松光尾、永田美津子、森本好栄、石川功、山本純代、島井博志、島井澄子、島井周子、吉川勉、大和田延子、田代勝、楠瀬正人、浜口興、小松和則、竹村達臣、石川康人、石川健史、秋山純一
 - 〈整理作業〉
小松経子、中西純子、宮本幸子、川井由香、岩本須美子、松山真澄、尾崎富貴、田坂京子（高知県埋蔵文化財センター 専門調査員）、山本雄介（同 専門調査員）
 - 〈報告書作成〉
竹井治雄（京都府埋蔵文化財センター）
7. 出土遺物及び調査資料は高知県立埋蔵文化財センターに於て保管している。尚、遺物についての注記は、辺路石南遺跡（あけぼの道路下末松地区）の調査に於ける出土遺物に95-7RNSを用い、五反地遺跡の調査に於ける出土遺物には96-3RNGを用いた。

本文目次

第一章 環境	1
第二章 経過と方法	5
第三章 調査の成果	
1. 辺路石南遺跡	7
2. 五反地遺跡	13

挿図目次

fig. 1 周辺の遺跡分布図	fig. 11 調査Ⅱ区 SB1平面図・エレベーション図
fig. 2 辺路石南遺跡 調査区位置図	fig. 12 調査Ⅰ区 SD1～SD3平面図・エレベーション図
fig. 3 五反地遺跡 調査区配置図	fig. 13 調査Ⅱ区 SD1平面図・セクション図
〈辺路石南遺跡〉	fig. 14 調査Ⅱ区 SD2～SD7平面図・エレベーション図
fig. 4 遺構配置図	fig. 15 調査Ⅱ区 SD8～SD16平面図・エレベーション図
fig. 5 SB1・SB2平面図・エレベーション図	fig. 16 道路遺構平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 6 SK1～SK5・SK7平面図・セクション図・エレベーション図	fig. 17 調査Ⅰ区 SX位置図・セクション図
fig. 7 SK6平面図・セクション図・エレベーション図、SX1・SX2セクション図	fig. 18 調査Ⅱ区 SX位置図・セクション図
fig. 8 SD1平面図・エレベーション図	fig. 19 辺路石南遺跡 出土遺物実測図
〈五反地遺跡〉	fig. 20 五反地遺跡 出土遺物実測図
fig. 9 調査Ⅰ区 北壁セクション図	
fig. 10 調査Ⅰ区 SK1・SK2、調査Ⅱ区 SK1平面図・セクション図・エレベーション図	

写真目次

- pl. 1 上 五反地遺跡全景
- 下 五反地遺跡 調査Ⅰ区 完掘状況（北側）
- pl. 2 上 五反地遺跡 調査Ⅱ区 完掘状況（北側）
- 下 五反地遺跡 調査Ⅱ区 完掘状況（南側）
- pl. 3 上 辺路石南遺跡 SB1、SB2他完掘状況
- 中 辺路石南遺跡 SK4完掘状況
- 下 辺路石南遺跡 SK5完掘状況
- pl. 4 上 辺路石南遺跡 SK6完掘状況
- 中 辺路石南遺跡 SK7完掘状況
- 下 五反地遺跡 調査Ⅰ区 SK2完掘状況
- pl. 5 上 五反地遺跡 調査Ⅱ区 SK1半截状況
- 中 五反地遺跡 調査Ⅰ区 SD1完掘状況
- 下 五反地遺跡 調査Ⅱ区 SD1完掘状況
- pl. 6 上 五反地遺跡 道路遺構（東から）
- 中 五反地遺跡 道路遺構（西から）
- 下 五反地遺跡 道路遺構（礫敷）
- pl. 7 上 五反地遺跡 道路遺構（西壁）
- 中 五反地遺跡 道路遺構（凹凸面）
- 下 五反地遺跡 道路遺構（轍）
- pl. 8 上 辺路石南遺跡・五反地遺跡 出土遺物
- 下 五反地遺跡 出土遺物

第一章 環 境

倒木痕跡に係る環境

調査区内で遺構検出に伴い発見された倒木痕跡は40数基に及ぶ。それらの平面形態は概ね円形や楕円形を呈している。断面観察から埋積過程はその殆どが縦位であり、台地構成層の砂礫層と旧表土である黒色土を一つの組み合わせとして存在する 경우가多かった。これら倒木痕跡から遺物の出土は見られない。

更新世後期に形成された扇状地を祖形とする長岡台地には構成層として河成堆積物が厚く堆積している。台地上層の表土下には旧河道の部分も残されているが、風化侵食による砂礫層の崩壊土等によって凹凸は緩やかな面へと変えられた。この台地上を嘗て表土として覆っていたと考えられる黒色土は火山灰の風化土を起源とし主に腐植によって発達したものである。台地面は周辺の沖積地部分に比べ高所に位置し、緩斜面であることから、土壌形成の母材となる岩屑の供給は僅かと考えられ、逆に重力成や水成、風成により、低所への土壌の流出が発生する状況であった。こうした条件のもとで表土は動植物遺体を中心に生物による土壌化を繰り返しながら、ある程度安定した層厚を保ち続けたものと考えられる。長岡台地上の各遺跡で検出される倒木痕跡は構成層である礫層にまで及んでいることから、表土層厚の増加や岩屑の供給は僅かであったものと考えられる。樹木は表土層に育まれ、表土直下の礫層に根を下ろした。四国地方は気候帯として湿潤暖温帯に属しており、台地上の植生は通常であれば極相として照葉樹林であるシイ・カシ類が主体を占める森林が形成され、それに伴う表土としては腐植土層である黄褐色土が存在したものと考えられる。

極相として黄褐色土が卓越する筈の森林で倒木痕跡内に黒色土の埋積が認められる。これは倒木痕跡を残した樹木が生育していた環境が既に森林でなく疎林的な状態であり、地表近くにはススキ等、イネ科草本類が主体を占め黒色土を形成する植生であったと考えられる。一般に黒色土の形成に係わる環境は草原的環境であり、地形的な制約や気候的な条件が無い限り植生は森林を極相とし、森林的環境から草原的環境への遷移の退行には人為的な影響が強いと考えられている。

長岡台地における黒色土の成立時期を明確にする資料は今のところないが、弥生後期に至って台地縁辺部を中心に出現する遺跡が多く存在し、台地上の各遺跡で検出される黒色土の一部に弥生後期土器が含まれることから、少なくともこの時期には台地上の人為的な開発が行われていたのは確実と考えられる。但し、今回の調査区を含めて多くの場合倒木痕跡内の黒色土には弥生後期土器は見られないことから、開発の始まりはそれよりも古いものと考えられる。

辺路石南遺跡や五反地遺跡で見られる倒木痕跡は、森林に対して伐採等の部分的な開発が行われた結果その周辺部で発生した森林後退の一例である可能性が強く、この段階から当時の人々にとって森林が生産域の主体から徐々に外されたものと考えられる。この開発は旧表土である黒色土を一掃した近世中期以降の灌漑水路の整備を基礎とした新田開発によるものと同様に、旧表土である黄褐色土を司る森林を駆逐して草原的環境とし黒色土を基盤とした植生の維持や生産域拡大を目ざしたものと考えられる。



0 2500m

fig. 1 周辺の遺跡分布図

道路遺構に係る環境

長岡台地西側の国分川北岸は古代長岡郡域である。ここには国衙跡、国分寺跡、比江廃寺跡などが存在する。この国府域に面する西の山麓斜面部分には小蓮古墳や舟岩古墳群等が存在する後期古墳の集中地帯である。これを背景として国分川北岸の国分、久礼田の平野部には香長平野のなかでも古い条里が残されている。また、国府域より規模は小さいものの古墳が集在する新改川流域には、延暦十五年以降設置されたとされる南海道の土佐国衙から最初の駅（頭駅）が本調査区の北、新改川の扇状地上に存在する。

長岡台地東側は古代延暦年間に長岡郡から分離された香美郡域である。ここには官衙に係わると考えられている大領遺跡があり、岩積には石留神社が存在する。物部川を渡ると深淵北遺跡、深淵遺跡、下ノ坪遺跡等古代から中世にかけて展開を見せる遺跡が存在し、丘陵部の西斜面にも大谷古墳などの後期古墳が散在する。

古代律令期の重要な伝達経路である南海道は畿内から紀淡海峡を経て四国に入るが、土佐に向かうルートとしては幾つかの経路が推定されている。伊予国府を経由して土佐に至る養老年間以前のルート、養老二年から新設された阿波から直接土佐に至るルート、延暦十五年に新設された後に“北山越え”とされるルート、それぞれ詳細は推測の域を出ないが、ルートそのものは後世そして現在も形や場所こそ違い概ね踏襲されているものである。古代に於ける官道としての条件は道の管理と駅の経営、その経済的な背景が存在するかどうかに係わるものと考えられている。

周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	白猪田遺跡	21	三添遺跡	41	陣山遺跡
2	笹原古墳	22	八反地遺跡	42	山田三ツ又遺跡
3	牛月古墳	23	中屋遺跡	43	須江駅跡
4	口ミノヲ谷古墳	24	小籠遺跡	44	須江上段遺跡
5	長源古墳	25	野中廃寺	45	新改古墳群
6	左右山古墳	26	大篠遺跡	46	タンガン窯跡
7	寺家古墳	27	東崎遺跡群	47	ひびのき遺跡
8	国分大塚古墳	28	野村丸遺跡	48	伏原大塚遺跡
9	西村古墳	29	金地遺跡	49	原遺跡
10	舟岩古墳群	30	若宮遺跡	50	高柳遺跡
11	狭間古墳	31	垣添遺跡	51	西佐古遺跡
12	蔵本1号墳	32	姥ケコタ遺跡	52	亀山窯跡
13	蔵本2号墳	33	宮後遺跡	53	溝淵山古墳
14	米内古墳	34	七反田遺跡	54	大谷古墳
15	岡豊城跡	35	神通寺遺跡	55	深淵北遺跡
16	土佐国分寺跡	36	下門田遺跡	56	深淵遺跡
17	国分寺遺跡	37	ヤイタ遺跡	57	下ノ坪遺跡
18	土佐国府跡	38	大領遺跡	58	田村遺跡群
19	比江廃寺	39	松原丸下遺跡	59	辺路石南遺跡
20	三島遺跡	40	松原丸遺跡	60	五反地遺跡

今回の調査で発見された道路遺構は概ねN-82° -Wの東西方向を示し、現在台地上に卓越する近世中期の新田開発に伴う土地区画とは異なる方向を持つ。台地上をこの方向で直進した場合、東西で台地の縁辺にあたる段丘崖を下るものと考えられる。西側は南国市廿枝附近で段丘崖を下り、そのまま北行し国分川を渡河すれば土佐国衙、西行すれば土佐国分寺に至る。東側は南国市西山附近で段丘崖を下り、そのまま東行すると大領遺跡の南を通過し、土佐山田町立岩で古代期の物部川河畔に至り、当時中州である戸板島を経て、対岸の野市町側に達する。

台地上に存在する道路遺構の延長線上には現在東西各々の段丘崖に切り通し部分が残されている。これらは“へんろ道”の一部として踏襲されているもので、東側の崖下から物部川に至る平野部においては卓越する条里地割りに影響されながらも先述の延長線上の渡河地点である戸板島附近に向かう。

参考文献

- 『小籠北遺跡』 1998年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』 1994年 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
浅海重夫編『土壌地理学』 1990年 古今書院
小坂一之、坂上寛一、佐瀬 隆、高野武男、細野 衛『新版地学教育講座 地表環境の地学―地形と土壌―』
1994年 東海大学出版会
只木良也『森林と人間の文化史』 1988年 日本放送出版協会
藤井英二郎、宮越リカ共訳『樹木からのメッセージ』 1998年 誠文堂新光社
児玉幸多編『日本交通史』 1992年 吉川弘文館
宅間一之「土佐国衙跡並びに国分寺の考古学的研究」山本 大編『高知の研究 1』 1984年 清文堂
大脇保彦「土佐の条里～その復元再考と補説」山本 大編『高知の研究 2』 1984年 清文堂
前田和男「古代土佐の官道について」山本 大編『高知の研究 2』 1984年 清文堂
『南国市史』 1979年 南国市史編纂委員会
『土佐山田町史』 1979年 土佐山田町史編纂委員会

第二章 経過と方法

調査に至る経過

今回の調査対象となった辺路石南遺跡と五反地遺跡は長岡台地中央部に位置する。周辺には弥生後期後半の拠点集落である東崎遺跡が台地上に存在しており、三畠遺跡、国分寺遺跡など弥生期以降の遺跡の分布が段丘崖下にも見られる。長岡台地上における発掘調査例は少なく今回のあけぼの道路敷設工事に伴う調査で小籠遺跡・陣山遺跡・山田三ツ又遺跡など弥生時代はもとより、台地上の本格的な開発が始まったとされる江戸時代後半の遺跡の様相が明らかにされつつある。

国道195号線のバイパス建設工事（通称あけぼの道路敷設工事）に伴い南国土木事務所長から埋蔵文化財の発掘に関する業務を財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターに委託する旨の打診があり、協議の結果、辺路石南遺跡（95年度）、五反地遺跡（96年度）の工事着手可能な区間において工事に先行して試掘調査を行う事となった。試掘調査は辺路石南遺跡（当初はあけぼの道路 下末松地区）では1995年2月、また五反地遺跡では1995年12月に実施した。この結果を受けて南国土木事務所と委託契約を締結し、遺構や遺物等、遺跡として広がり期待できる箇所を中心にして本調査を開始した。

調査方法

〈辺路石南遺跡〉

本調査は試掘調査時、柱穴遺構が検出された調査対象地の北側部分から重機による表土掘削を行った。長岡台地上の他の遺跡にも見られる茶褐色土はここでも存在し、表土の除去に伴ってこの茶褐色土で遺構の大部分は検出された。公共座標に基づいた4 m×4 mのグリッドを調査区内に設定し、遺物の取り上げや遺構の測量などはこれを基準として行った。

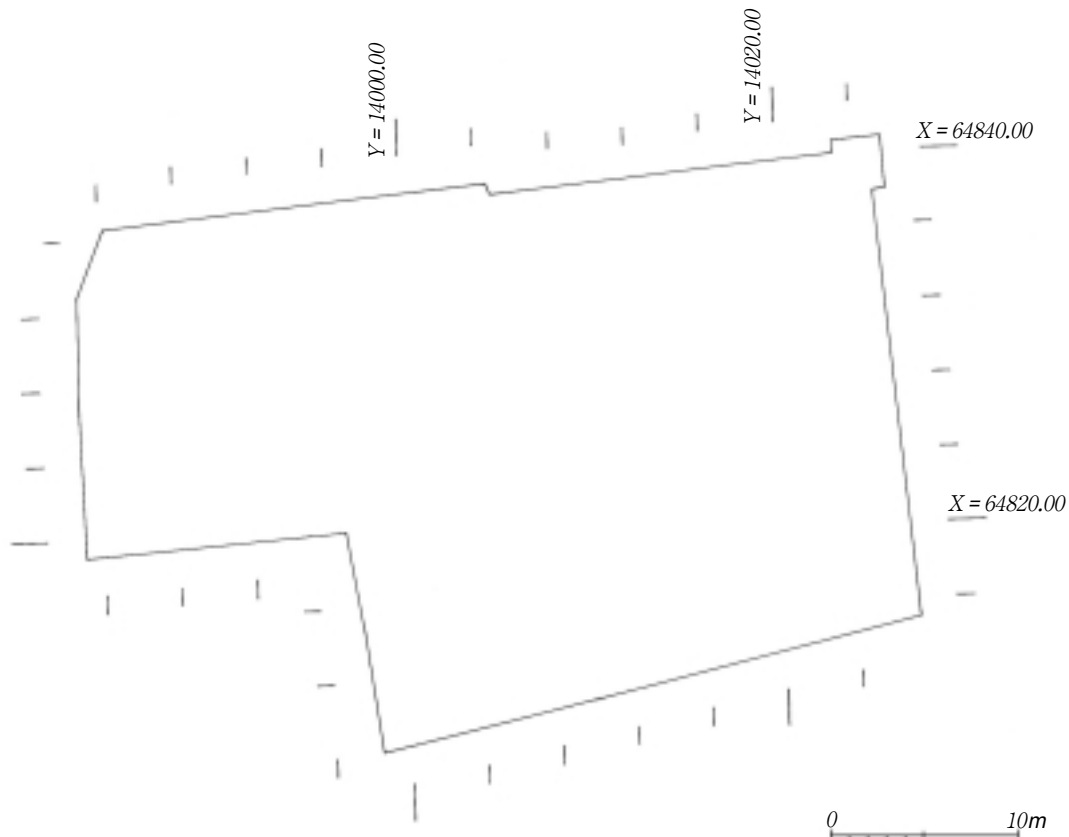


fig. 2 辺路石南遺跡 調査区位置図

〈五反地遺跡〉

本調査は重機による表土掘削から開始された。表土は調査区西隣の路線内に移動の上、盛土して管理した。調査区内では表土（耕作土・床土）を除去した時点で遺構検出面である茶褐色土や黄色砂礫が出現するケースが多く、辛うじて道路遺構の検出された調査Ⅰ区中央部西側で部分的に旧表土である黒色土を確認することができた。長岡台地とその周辺の遺跡では黒色土が遺物包含層であるケースが多く、また遺構埋土ともなり得ることからこの部分を中心に人力による精査を行った。

遺物の取り上げ及び測量は公共座標に基づいて調査区内にグリッドを設定し、これに従って行った。



fig. 3 五反地遺跡 調査区配置図

第三章 調査の成果

1. 辺路石南遺跡

概要

辺路石南遺跡の調査に際しては遺構の検出を茶褐色土層の上面で行った。長岡台地本来の構成層である砂礫層は遺構の検出面では殆ど認められなかった。また、比較的古い時期の遺構埋土や遺物包含層として存在し、嘗ては台地上に標準的な表土であったと考えられる黒色土（通称 黒ボク）もここでは未検出である。

遺構検出面以上の堆積層は上からⅠ層：耕作土とⅡ層：暗褐色土層である。

遺構は調査区の北西部に集中しているが、重複する掘立柱建物のSB1とSB2を除けば殆どが単独での検出であった。並存する土壌のSK4とSK5は埋積の状態から同時期のものと考えられるが、底部に残された小溝はSK4にのみ認められる。

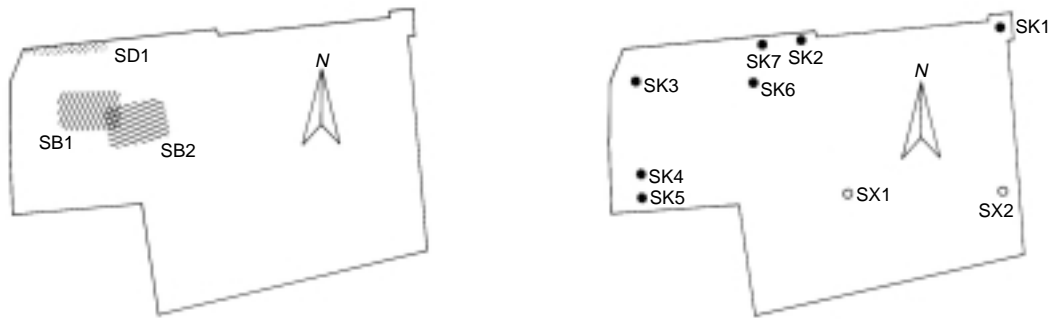


fig. 4 遺構配置図 (1 : 800)

SB1					
fig.	方向	規模 (m)			遺構埋土
5	N-84° -E	1間 (3.20)×3間 (5.50)			黒褐色土
〈柱穴法量〉					
ビットno.	規模 (cm)	平面形	深さ (cm)	その他	
1	直径34	円形	31	柱痕	
2	28×30	楕円形	42		
3	直径30	円形	45		
4	直径28	円形	46		
5	直径28	円形	42		
6	直径27	円形	40		
7	28×30	楕円形	41		
8	25×28	楕円形	46		

SB2					
fig.	方向	規模 (m)			遺構埋土
5	N-83° -E	1間 (3.60)×3間 (5.90)			黒褐色土
〈柱穴法量〉					
ビットno.	規模 (cm)	平面形	深さ (cm)	その他	
1	直径32	円形	52		
2	28×34	楕円形	62		
3	46×48	楕円形	68	柱痕、陶器1点 (搦鉢 fig.19-3)、鉄製品1点	
4	34×36	楕円形	67		
5	36×46	不整楕円形	58		
6	33×36	楕円形	67		
7	直径36	円形	74		
8	34×38	楕円形	75		

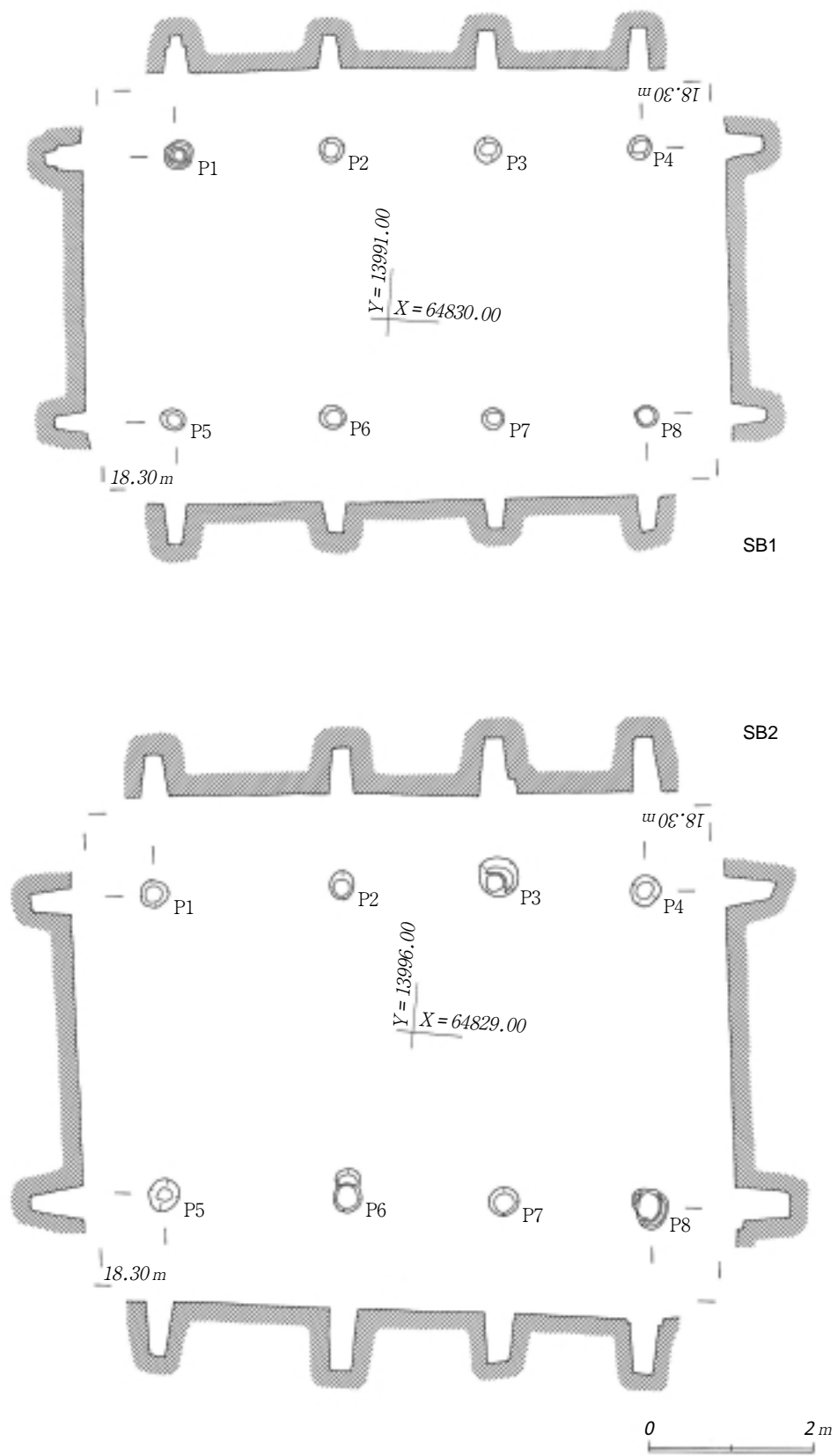


fig. 5 SB1・SB2平面図・エレベーション図

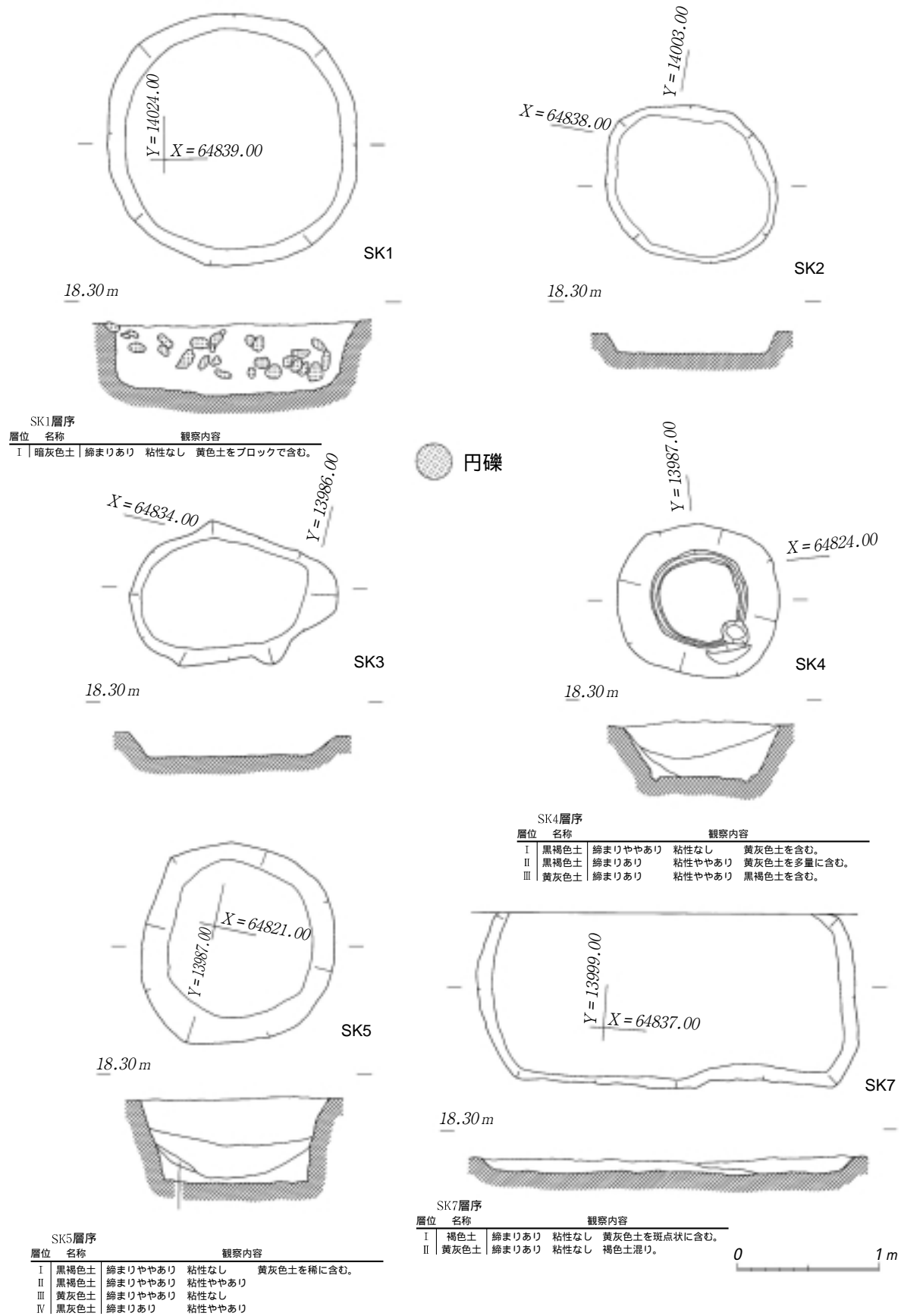


fig. 6 SK1~SK5・SK7平面図・セクション図・エレベーション図

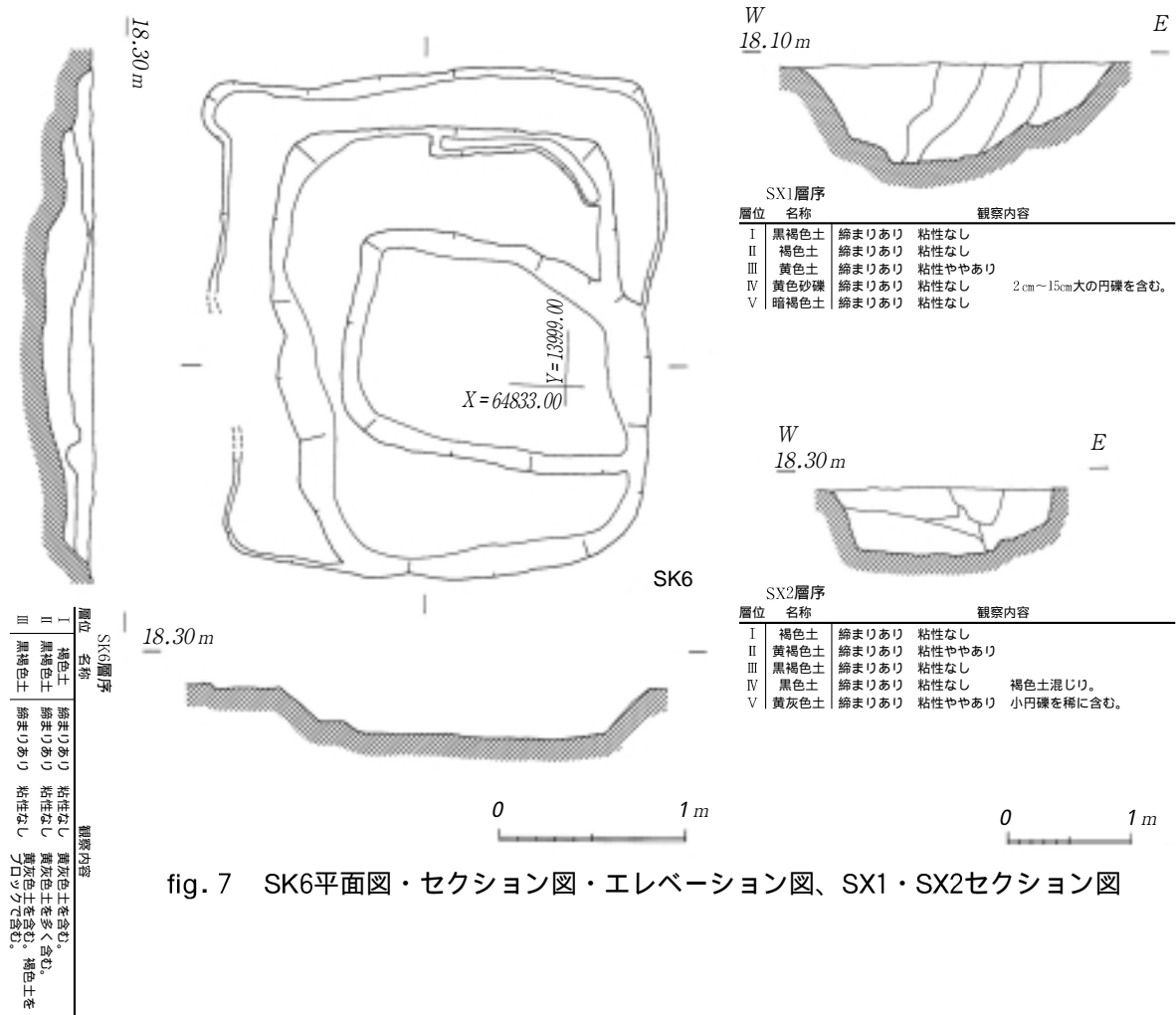


fig. 7 SK6平面図・セクション図・エレベーション図、SX1・SX2セクション図

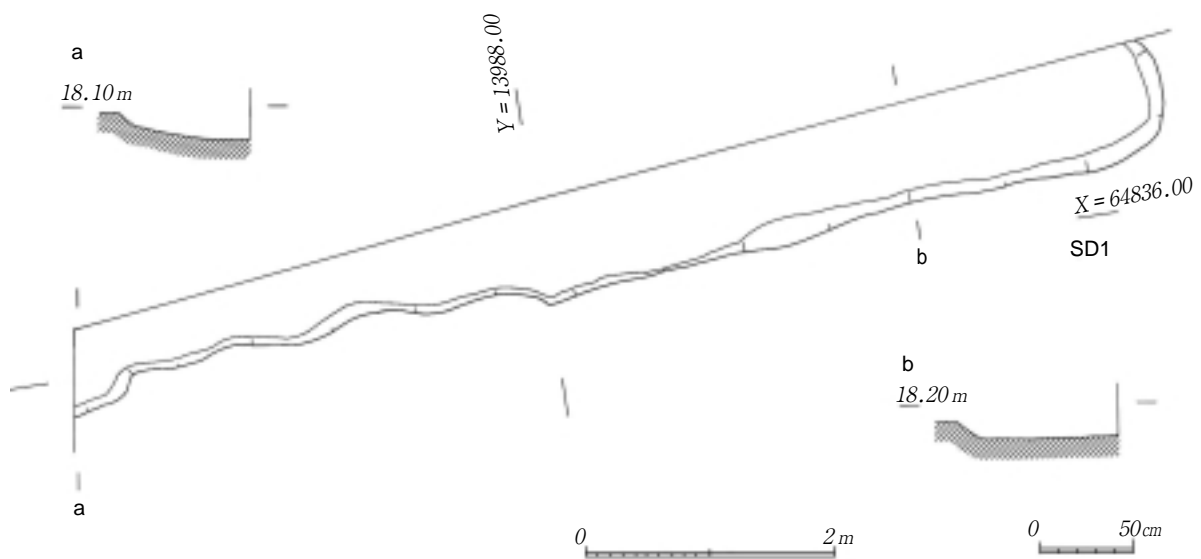


fig. 8 SD1平面図・エレベーション図

SK1						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	直径1.7	円形	45~50	灰褐色土 (拳大の円礫を多く含み、黄色土が混じる。)	磁器 1点、土師器 1点 (小皿 fig.19-1)、陶器 2点、砥石 1点 (仕上げ砥 fig.19-6)、瓦 1点、鉄製品、ガラス	外周と底部には黄色土による枠を施す。
SK2						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	1.2×1.0	楕円形	15~22	黒褐色土 (黒色土を斑に含む。)	須恵器 1点	
SK3						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	1.4×0.9	不整楕円形	13	黒褐色土	土師器 1点	
SK4						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	直径1.1	円形	36	黒褐色土 (黄灰色粘土混じり)	鉄製品 2点	底面には直径70cmの円形に幅 5cm、深さ 3cmの小溝が廻る。
SK5						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	直径1.3	円形	55	黒褐色土 (黄灰色土混じり)	磁器 3点 (碗 fig.19-5、小皿 fig.19-4)、陶器 4点、土師器 1点、弥生土器 2点、釘 5点	底部は平らで赤色土と砂の混じった堆積が認められる。
SK6						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
7	2.7×2.4	隅円長方形	25	黒褐色土 (黄灰色土混じり)	弥生土器 1点	周辺部分の浅い箇所では黄灰色土の堆積が見られる。
SK7						
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
6	2.7×1.2	隅円長方形	10	褐色土		
SD1						
fig.	方向	確認延長 (m)	幅 (cm)	検出面からの深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物
8	E	9	<50~80>	10	暗灰色土	磁器 1点、陶器 1点 (皿 fig.19-2)

※ < > 内の数値は、確認値。

まとめ

辺路石南遺跡の今回の調査で検出されたSK4・SK5は形態や規模から同様な性格の土坑と考えられる。あけぼの道路建設に係る調査では台地上で同様な性格の土坑が幾つか発見されている。それらに見られる諸特徴は以下のような点である。

- ① 平面形態は円形を呈するものが多く、隅円長方形・不整形を呈するものが存在する。
- ② 土坑床面は平滑に整えられ一部には円形に廻る小溝が存在する。
- ③ 土坑の底部や側面の一部分に粘土塊を意識的に配した形跡が見られるものも存在する。
- ④ 土坑上部には人頭大の円礫を配したか積み上げていた可能性がある。

①は、基本的に内部構造または土坑内に収納するものの形態にかかわるものと考えられる。つまり、収納物が桶形の場合は平面形態が円形を呈し、箱形の場合は方形を呈するであろう。本遺跡のSK4・5は円形の部類に属することから、桶形の収納物が存在したものと考えられる。但し、山田三ツ又遺跡SK24に見られるような掘方が方形を呈すると考えられるものにも、土坑底部に残された円形に廻る小溝の存在から桶形の収納物が存在していたことを示唆する。また、底部痕跡の無いものについては京町遺跡等に見られる様に平面形態と収納物の形が異なる可能性は否定できない。

②は、③と係わる収納物の安定を目的とするものと考えられる。また、底部の広さについては改葬の痕跡が認められないことから、土坑内に収納されるものの大きさに規定されるものであろう。先述の小溝と土坑壁の状況から掘方の壁を垂直に近く仕上げて底部を広く仕上げられるものと断面形が逆台形を呈し底部は収納物の底とほぼ同じサイズで仕上げられるものが存在する。前者の例としては本遺跡SK5や山田三ツ又SK21が存在し、本遺跡のSK4や山田三ツ又遺跡SK45は後者の例と考えられる。

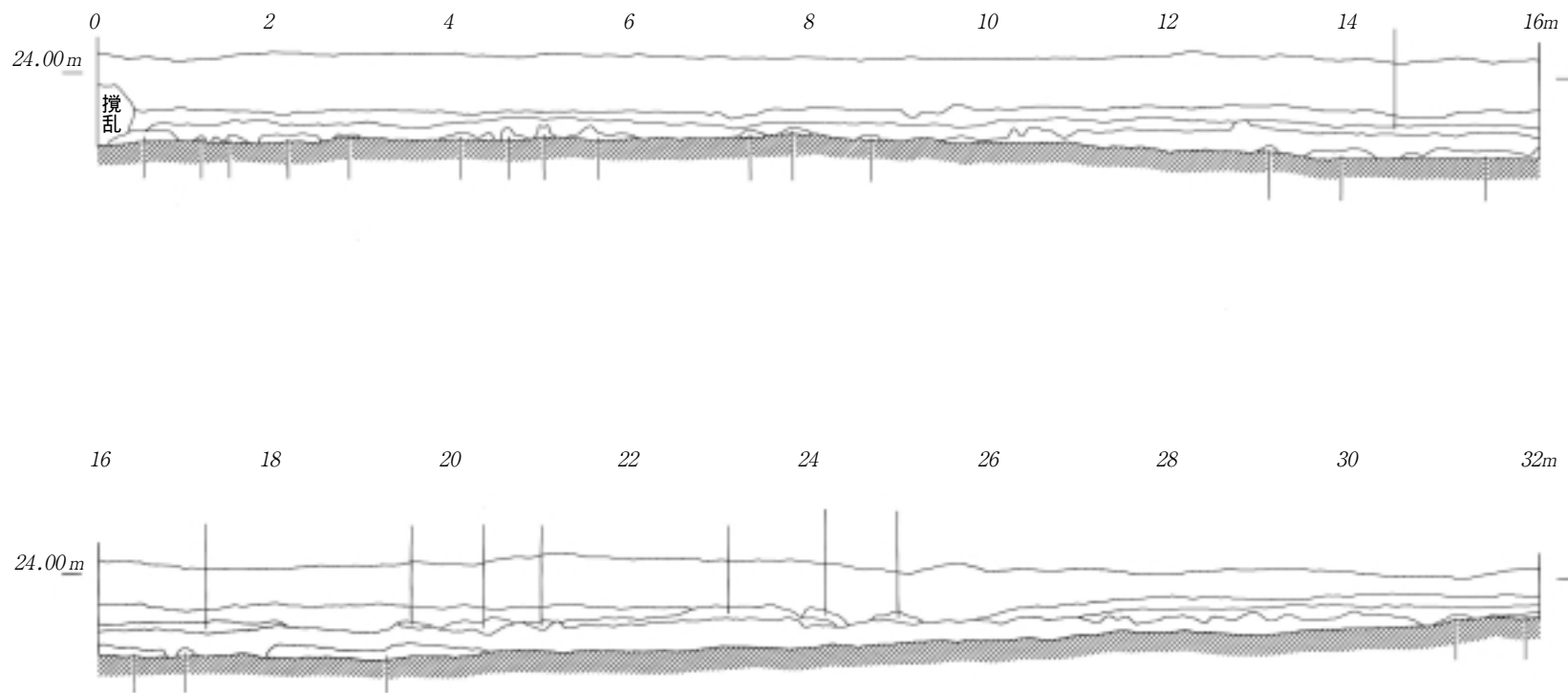
③は、土坑の一部に粘土塊を施すことで収納物の安定を図ったと考えられる例である。小籠遺跡SK24の底部に施されたもの、山田三ツ又遺跡SK45の土坑側面に施されたものが存在する。

④については、土坑上部の状況は本遺跡のSK4・5からは把握しきれない。山田三ツ又遺跡のSK21で見られる土坑内部に落ち込んだ20～30cm大の円礫の存在から、本来土坑上部に積み上げられていた可能性がある。

土坑群からの出土遺物は僅少で、数基から釘、陶磁器、土師器などの出土が見られる。土坑の性格としては埋葬施設と考えるのが妥当と思われ、この内陶磁器には意識的に打ち欠いたと考えられるものも存在する。本遺跡のSK5は掛け分けの磁器で肥前産、小籠遺跡SK14では見込蛇の目釉剥ぎの皿で内野山産が出土している。いずれも17世紀末から18世紀代を中心として生産されたものである。これらの土坑墓は墓域として確定される以前、長岡台地上の新田開発の本格化したとされる江戸時代中期の早い段階に入植した人々の埋葬施設と考えられる。

参考文献

- 『小籠遺跡 I』 1995年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『山田三ツ又遺跡』 1997年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『京町遺跡 3』 1994年 (財)北九州市教育文化事業団



北壁層序		観察内容	
層位	名称		
I	灰色土 (耕作土)		
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 弥生土器・土師器を含む。
III	黒色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク
IV	黒色土	締まりあり	粘性なし
V	黄褐色土	締まりあり	粘性なし 火山灰土主体。

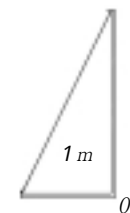


fig. 9 調査 I 区 北壁セクション図

2. 五反地遺跡

基本層準

五反地遺跡は長岡台地と呼ばれる更新世後期形成の隆起扇状地上に存在していることから、遺跡周辺では停滞からマイナスに近い堆積環境の中で黒色土に見られる様な生物による土壌化が繰り返されたものと考えられる。台地上の人為的な開発により自然発生的な堆積状況は失われがちであるが、ここでは以下の5層を基本的な堆積土層として扱い調査を進めた。

I層・・・耕作土であり、色調は灰色を呈す。層厚は20～30cm程度で、土師器・須恵器・近世陶磁器等が出土している。

II層・・・調査区の殆どで耕作土下に存在した。色調は暗褐色を呈する。弥生土器・土師器の細片を含んでいる。耕作に伴い他所から運び込んだ土の可能性が高い。

III層・・・長岡台地上の遺跡で見られる火山灰土を含んだ旧表土（腐植土層）で、通称黒ボクと呼ばれる。色調は黒色から黒褐色を呈する。調査区の中央部分に広がりを持ち、遺物は包含しない。

IV層・・・III層と層の起源は同様と考えられる。色調は黒色から黒褐色を呈する。上位に火山灰土二次堆積層が帯状に見られる。

V層・・・火山灰土を主体として黒色土が混じる部分。

遺構の検出は以上の5層を除去した状態で行ったが、台地上の本格的な開発が始まる以前の古い時期の遺構の多くは黒色土を表土として掘削されたものと考えられ、この黒色土が良好な状態で残っていれば上位からの遺構の検出も可能である。

I 区SK1

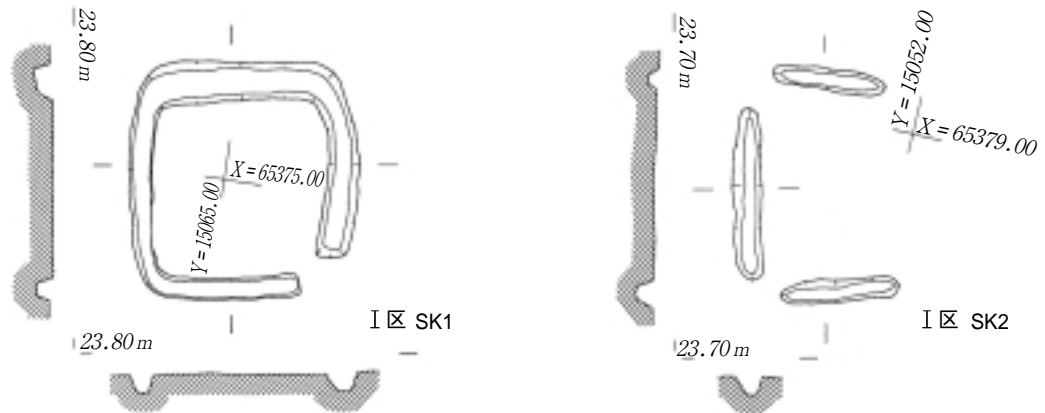
fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
10	1.2	隅円方形	10	黒色土 (黄褐色土)		幅20cm、深さ10cm、断面形U字型の溝が南東隅を除いて隅円方形に廻る。

I 区SK2

fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
10	1.3×0.8	隅円長方形	9	黒色土		幅12～16cm、深さ9cmの小溝がコの字状に検出。構造物の底部痕跡？

II 区SK1

fig.	規模 (m)	平面形態	検出面からの 深さ (cm)	遺構埋土	出土遺物	その他
10	1.7×0.8	隅円長方形	30	灰色土	土師器6点、釘1点	北側と南側に段部が存在する。深い中央部の底面は平らで、10～20cm大の河原石が存在する。



● 円礫

II区 SK1層序		観察内容		
層位	名称			
I	灰色粘土	締まりあり	粘性あり	土師器を含む。
II	灰色粘土(暗灰褐色土混)	締まりあり	粘性あり	
III	灰色粘土	締まりあり	粘性あり	床直上に拳大の河原石を含む。

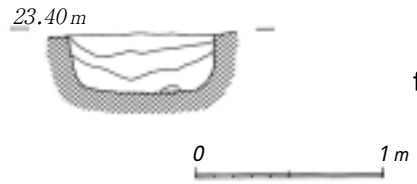


fig.10 調査I区 SK1・SK2、調査II区 SK1
平面図・セクション図・エレベーション図

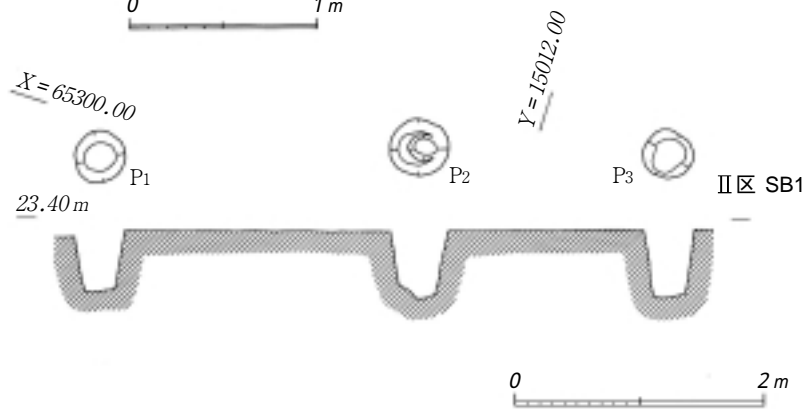


fig.11 調査II区 SB1平面図・エレベーション図

SB1		規模 (m)		遺構埋土	
fig.	方向	2間 (4.50)		黒色土(黄色土混じり)	
〈柱穴法量〉					
ピットno.	規模 (cm)	平面形	深さ (cm)	その他	
1	直径40	円形	46	柱痕	
2	直径46	円形	54	柱痕	
3	36×40	楕円形	55		

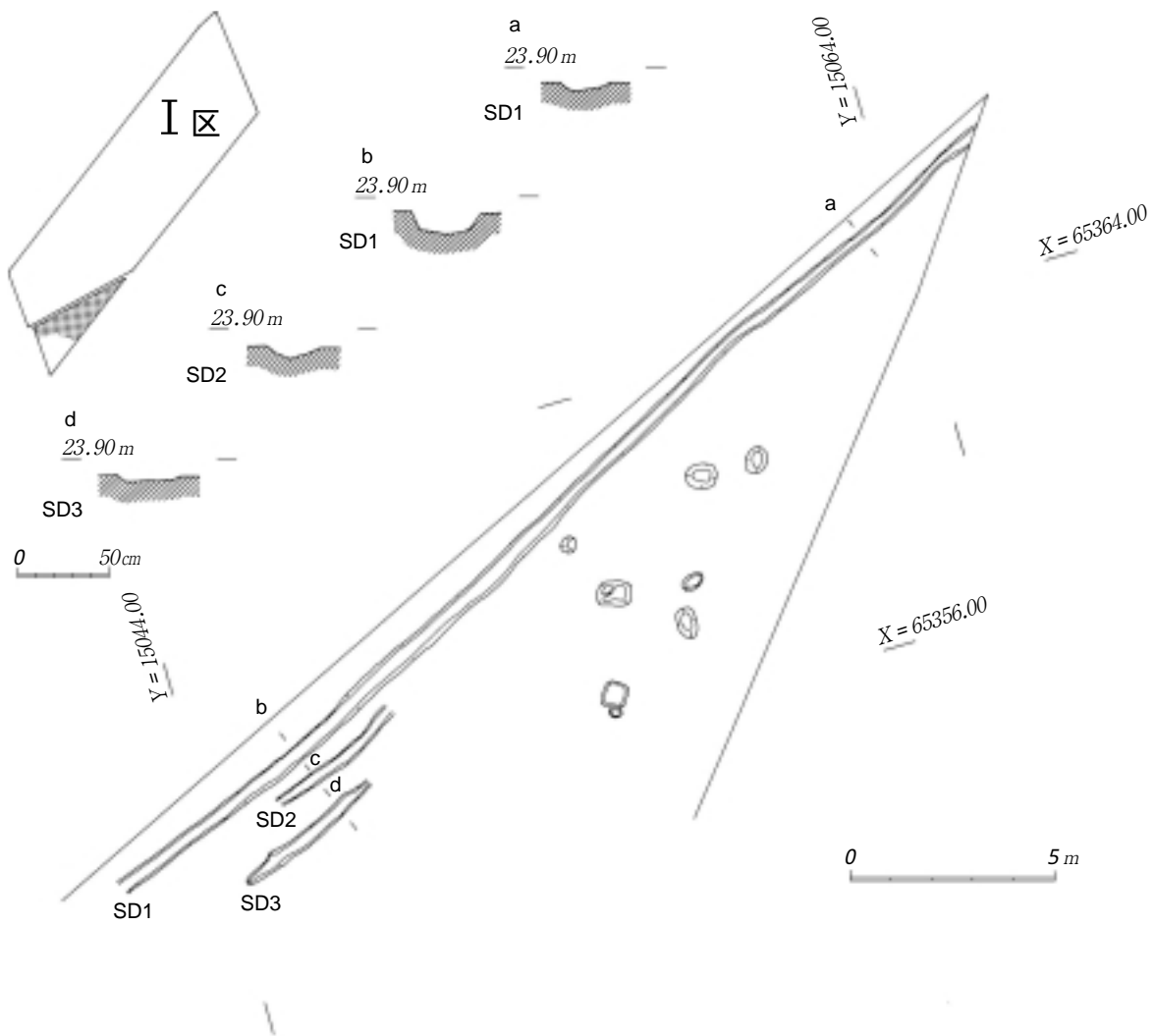


fig.12 調査I区 SD1～SD3平面図・エレベーション図

I区SD

no.	方向	確認長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺構埋土・出土遺物・その他	備考
1	ENE	27.6	30~40	5~12	灰色土、土師器50点(小皿fig.20-1)(坏fig.20-8)、弥生土器7点、須恵器2点、磁器1点、ガラス1点、釘2本	fig.12
2	ENE	3.6	30	6	黒色土	fig.12
3	ENE	3.8	30~40	4	黒色土	fig.12

II区SD

no.	方向	確認長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺構埋土・出土遺物・その他	備考
1	NNW	31.2	120~140	50	弥生土器1点、土師器1点、須恵器1点、陶器1点、磁器1点	fig.13
2	ENE	28.2	10~13	9~13	暗褐色土(橙色土混じり)	fig.14
3	NNW	4.5	22~30	8		fig.14
4	NNW	8.5	34~46	5~8	不連続	fig.14
5	NNW	4.9	32~38	6~9		fig.14
6	NNW	4	26~34	5~8		fig.14
7	NNW	14	40~54	4		fig.15
8	NNW~WNW	3.4	30~50	6	II区SK1に係わるもの?	fig.15
9	NNW	11.2	35~40	2		fig.15
10	NNW	3.1	44	2		fig.15
11	WNW	15	30~50	5~9		fig.15
12	ENE	2.8	40~50	5		fig.15
13	ENE	2.6	36~60	4	黒色土(灰色土が混じる。)	fig.15
14	ENE	3	26~34	3		fig.15
15	E	4.6	30	6		fig.15
16	ENE	4.8	38~50	8		fig.15

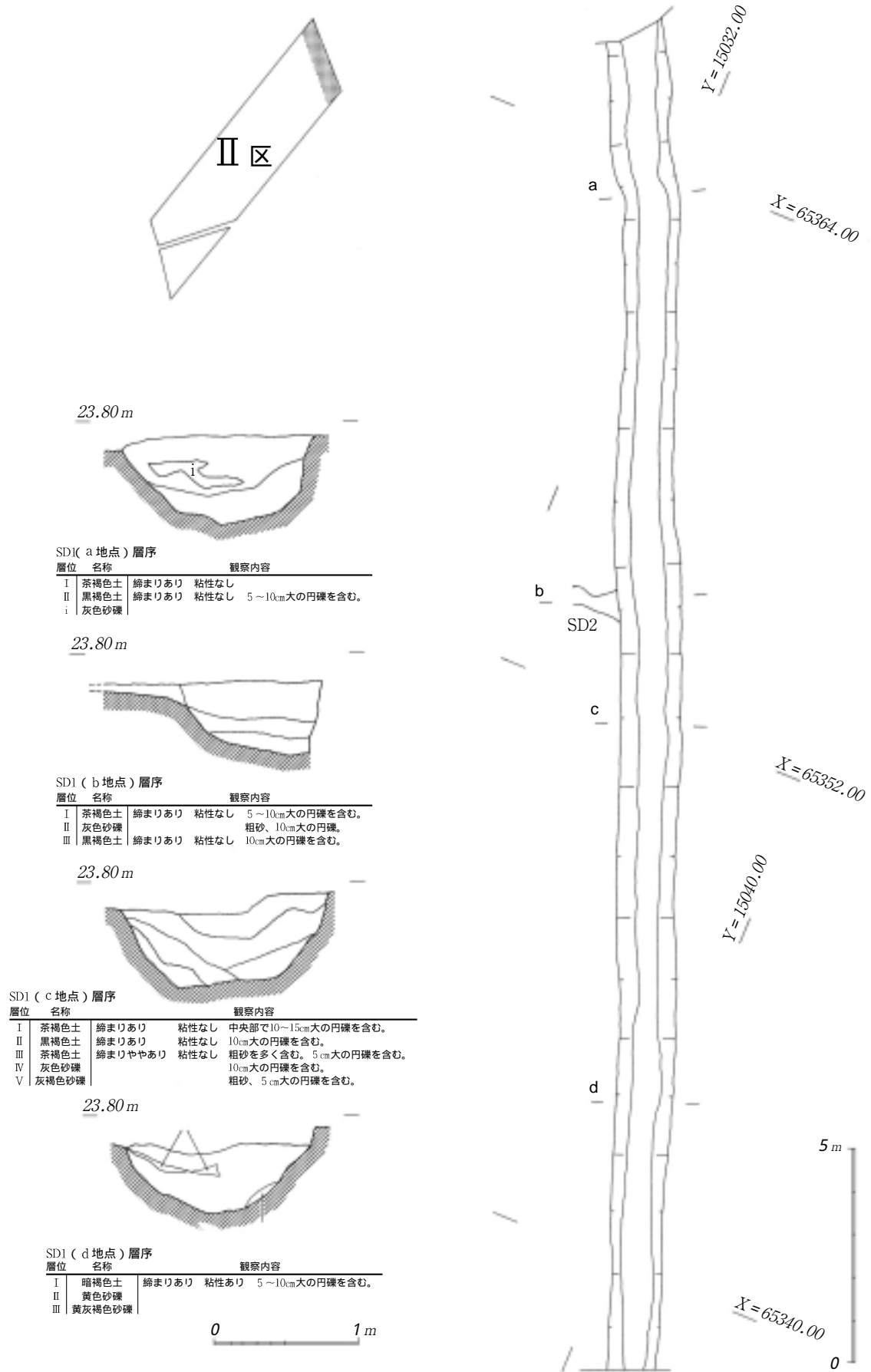


fig.13 調査II区 SD1平面図・セクション図

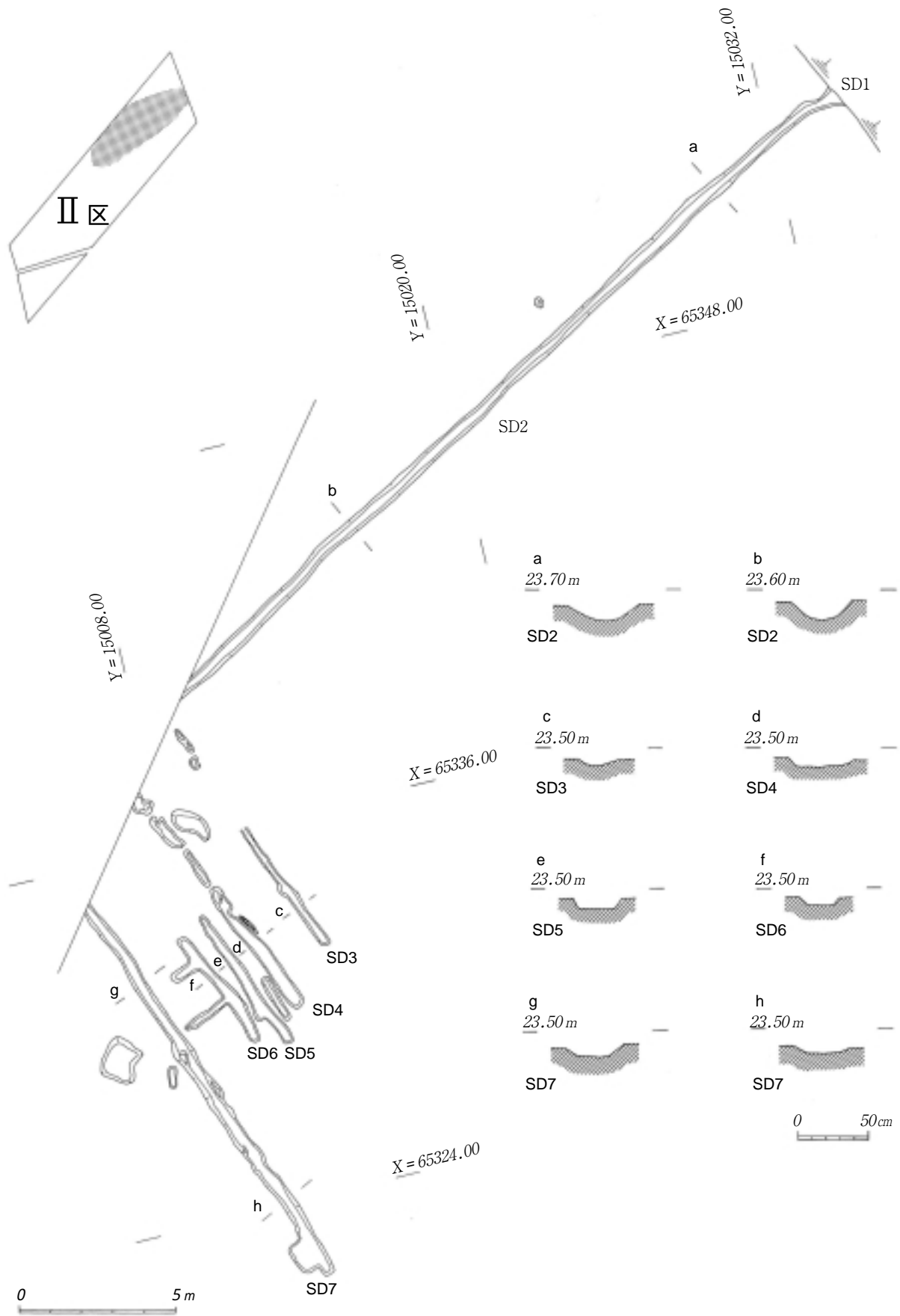


fig.14 調査Ⅱ区 SD2～SD7平面図・エレベーション図

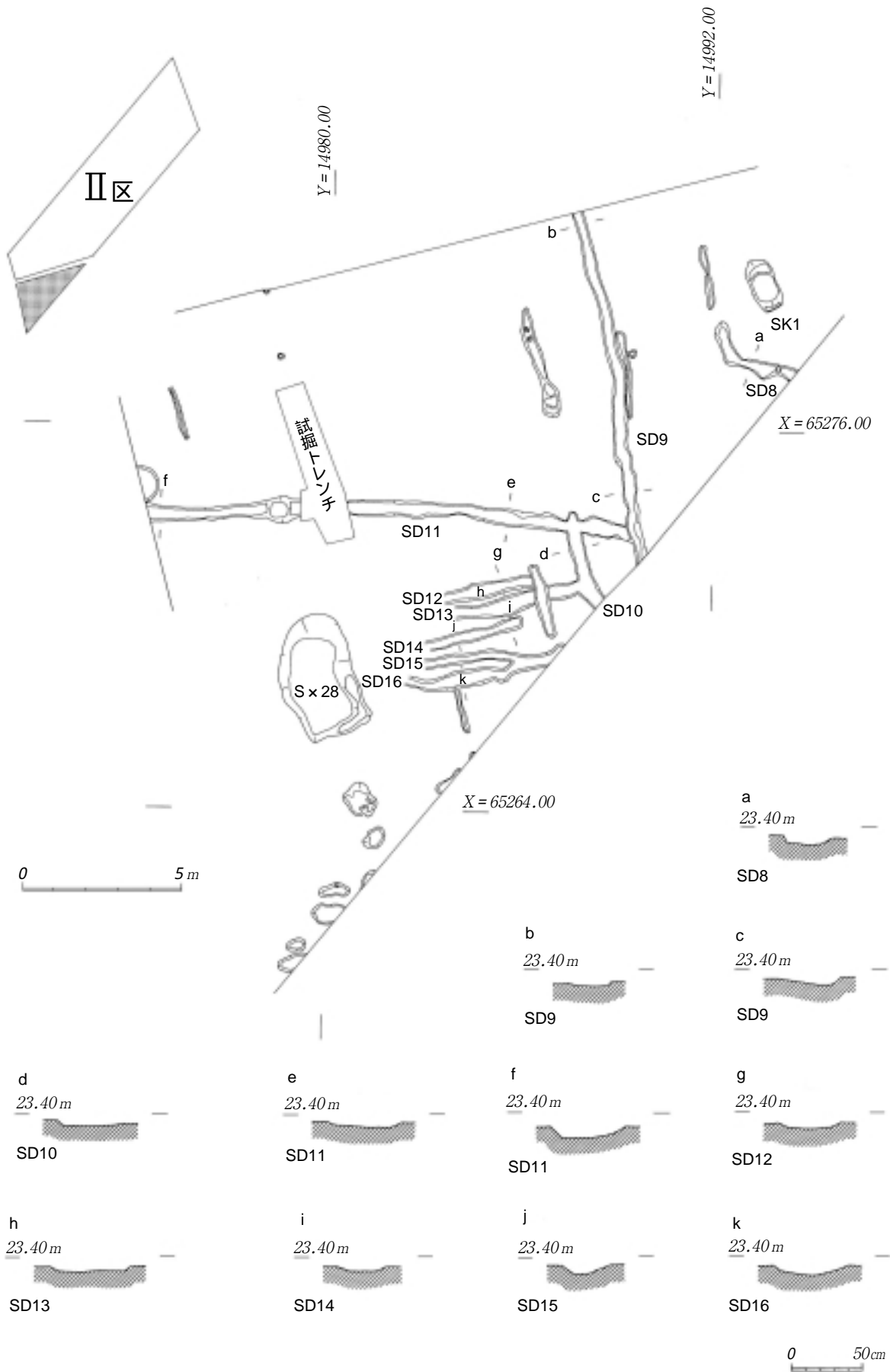


fig.15 調査II区 SD8～SD16平面図・エレベーション図

道路遺構

調査Ⅰ区の中央部で検出された硬化面を伴った帯状の遺構を道路遺構として扱った。この道路遺構は調査区を東西に横断するもので、比較的保存状態の良かった調査区西壁部分では溝状に黒色土が遺構を覆っていた。西壁寄りには扇状地形成時の流路部分に相当し、東側の砂礫層が浅く存在する部分に比べ地盤が軟質であり、溝や轍が認められる。また、東側は後世の水田区画では上位に当たることから削平を受けており、東壁際では道路遺構の存在を確認する事は出来なかった。

道路方向はN-82°-W前後であり、幅は2 m70cm～3 m60cmを測る。調査区全体で遺構検出面とした茶褐色土を路面として整形を加えたものと考えられ、路面部分は硬く締まりを持つ。

路面に沿って南には溝状の落ち込みが存在する。北側には溝と認められる様な落ち込みは存在しない。溝の規模は幅40cm、路面からの深さ7 cm、確認長は7 m50cmを測る。この溝は東に向かうに従い浅く、不明確に成ることから、側溝として全路線に平行して設置されたものとは考え難く、この場所に部分的に溝を設ける必要があったものと考えられる。

路面の南側には残存幅30cm～80cm、厚さ1 cm～2 cmに小円礫を敷き詰めた部分が帯状に存在する。これと同様の敷石部分が路面の中央部に部分的に、また東に向かうに従い敷石部分自体が路面の中央寄りに検出されている。主に帯状に残存している状況と礫の規模が小さいことから、当初または機能していた期間のなかで路面全体を覆っていたとは考え難い。ある程度の路面の使い分け、人と車の通行区分が成され、礫敷部分は人の通行部分であったものと考えられる。

西側部分の路面には数カ所の凹部が見られる。凹部の平面形は不整楕円形または不整円形を呈するものが多く、道路方向に対してそれらの長軸方向は概ね直行する。埋土は硬く締められ、面を成す様に仕上げられているが、他の路面に比べて黒色を帯びる。路面からの深さは約10cmで、何れの凹部も底面には拳大の円礫が存在した。凹部はその規模の統一、また等間隔での配置といった意図は見られない。

轍は西壁際に2条と調査区中央寄りに6条が確認できる。後者の幾条かはその西端部で北寄りに方向を変化させる傾向にある。轍の断面形態は逆台形または鍋底状であり、路面からの深さは3 cm～6 cmである。測定可能な部分の轍心々間は約160cmである。

その他、道路遺構に伴うものとして南側の溝内に2ヶ所と路面北端に1ヶ所、25cm×30cmの規模を持つ平面形態長方形の浅い落ち込みが存在している。また、調査区の中央部ではこの道路遺構が倒木痕跡上を通過しており、ここでは軟弱な倒木痕跡の黒色土部分に拳大の円礫を施し、路面の安定を図った形跡が認められる。

出土遺物は何れも須恵器の破片2点であり、図化できるものは無い。この内1点は路面整形痕である礫敷内からの出土である。

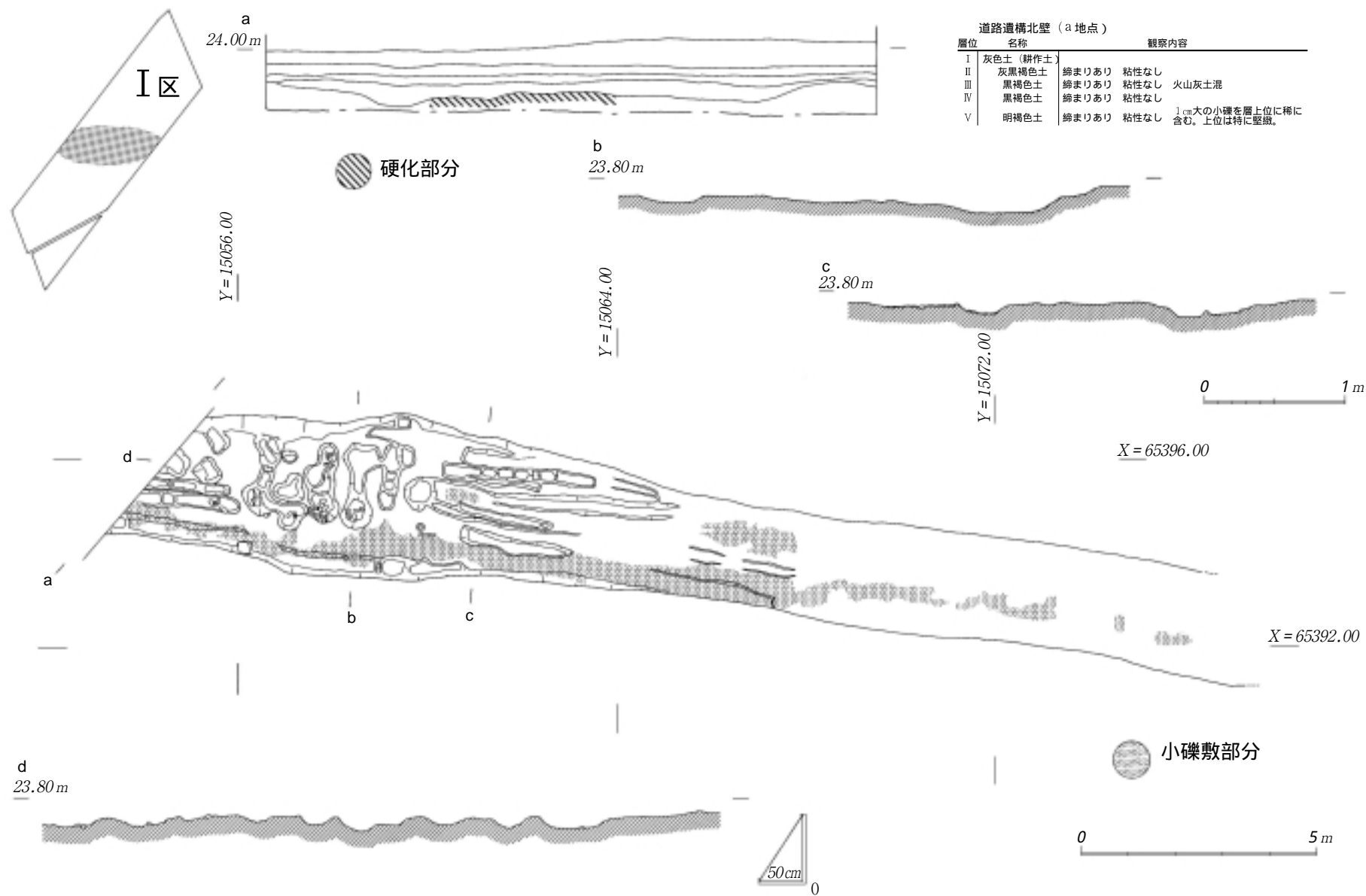


fig.16 道路遺構平面図・セクション図・エレベーション図

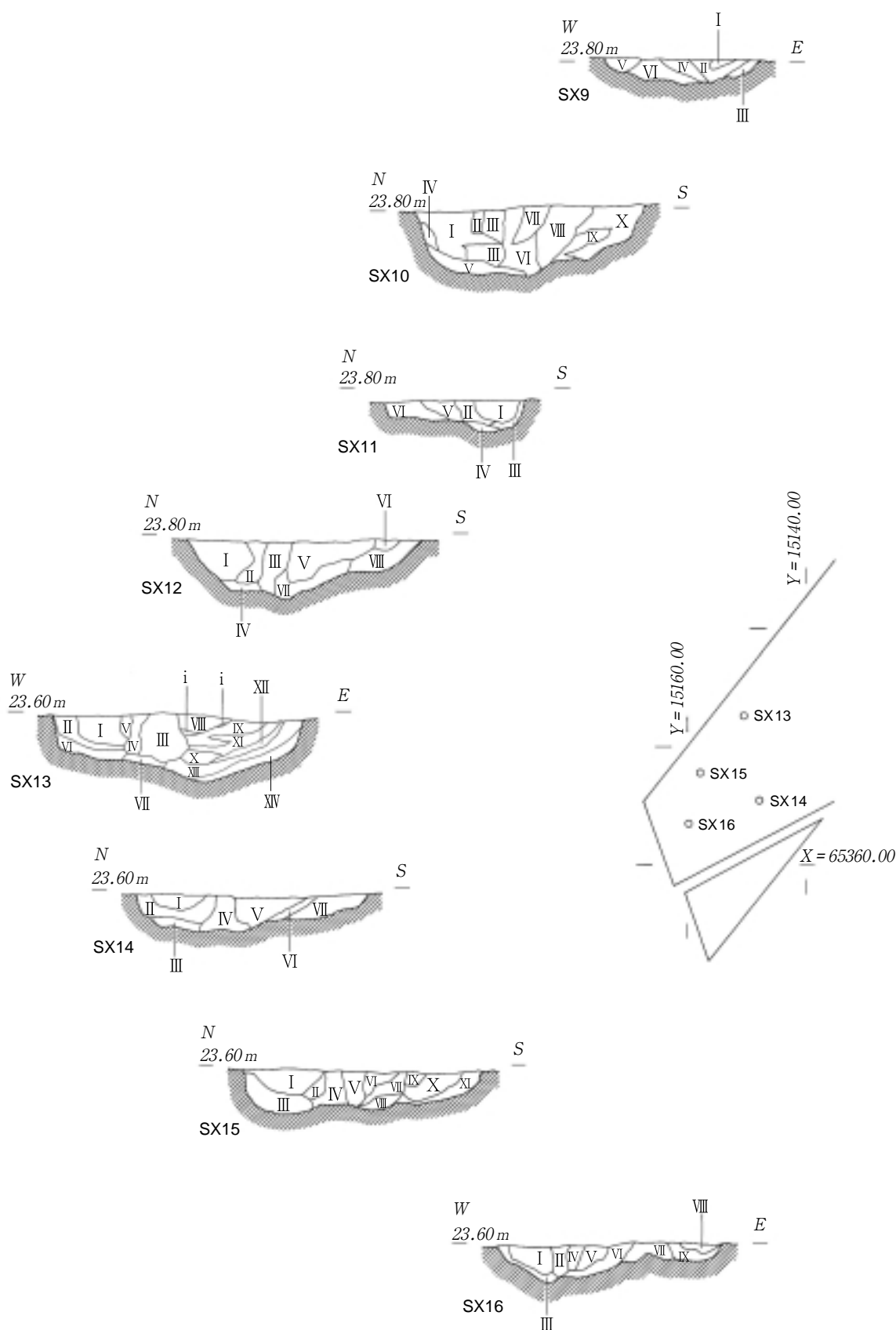
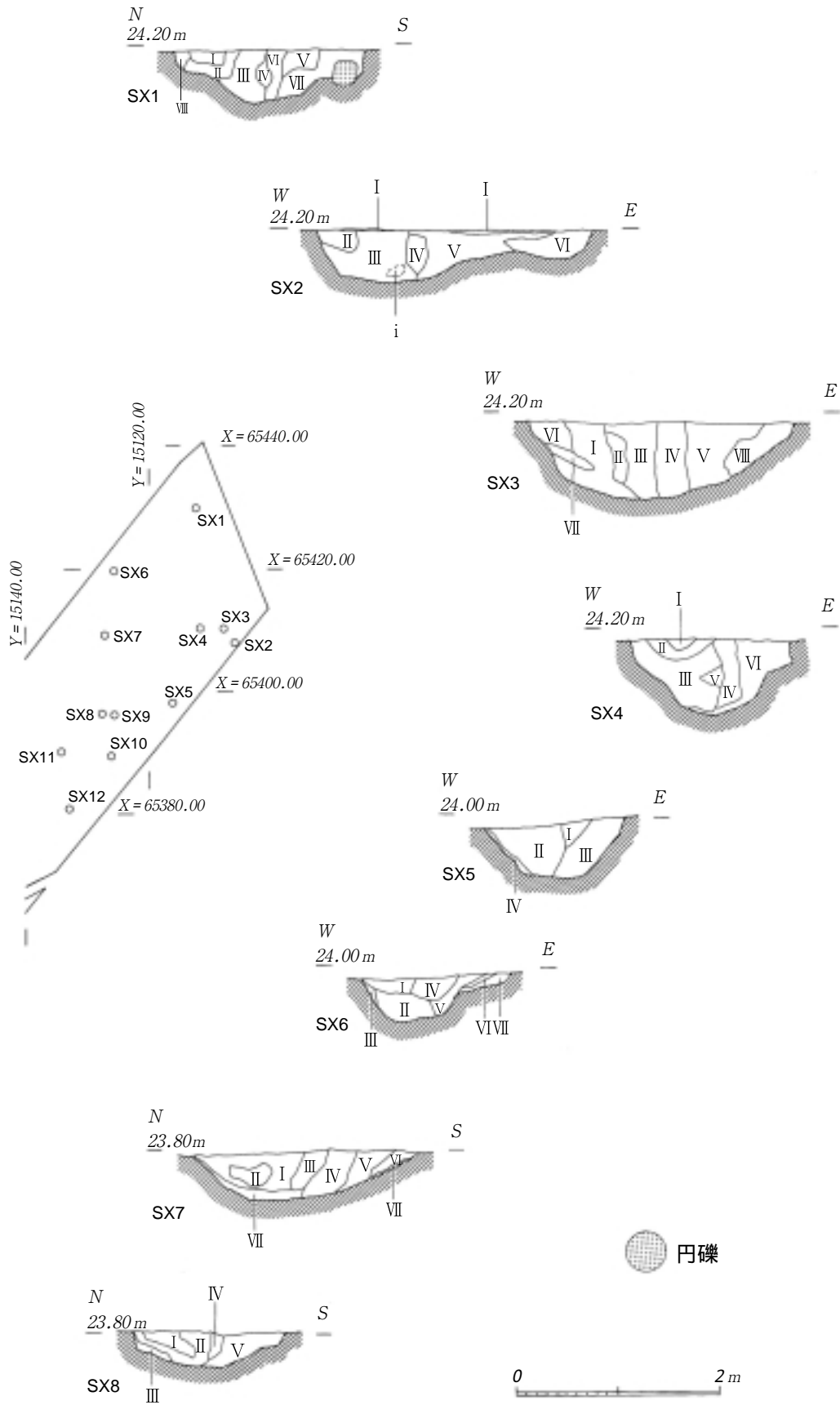


fig.17 調査Ⅰ区 SX位置図・セクション図



I 区 SX1～SX9層序

SX1				SX6			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	火山灰土二次堆積	I	暗褐色土	締まりあり 粘性なし 3 cm大の円礫を稀に含む。
II	褐色土	締まりあり	粘性なし	黒ボク・火山灰土を含む。	II	暗褐色土	締まりあり 粘性なし 1～3 cm大の円礫を少量含む。
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	黒ボク混り	III	暗褐色土	締まりあり 粘性なし 黄色砂礫層崩壊土を含む。
IV	暗褐色土	締まりややあり	粘性なし	1～2 cm大の円礫を含む。	IV	橙色土礫混	締まりあり 粘性ややあり 10～15 cm大の円礫を含む。
V	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	5 cm大の円礫を含む。	V	褐色土	締まりあり 粘性ややあり 1 cm大の円礫と粗砂を含む。
VI	褐色土	締まりあり	粘性ややあり	3 cm大の円礫を含む。	VI	黄褐色土	締まりあり 粘性なし 火山灰土二次堆積、3～5 cm大の円礫と粗砂を含む。
VII	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	小礫・粗砂・30 cm大の円礫を含む。	VII	暗褐色土	締まりあり 粘性なし
VIII	茶褐色土						

SX2				SX7			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性ややあり	黒ボク	I	黒色土	締まりあり 粘性なし 火山灰土混じり。
II	黒色土	締まりあり	粘性なし	黒ボク	II	黄褐色土	締まりあり 粘性なし 火山灰土二次堆積。
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	黒ボク・火山灰混り。	III	橙色土礫混	締まりあり 粘性ややあり 3 cm大の円礫を含む。
IV	褐色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	5 cm大の円礫を含む。	IV	黄色土礫混	締まりあり 粘性ややあり 10 cm大の円礫を含む。
V	橙色礫	締まりあり	粘性ややあり	5～10 cmの円礫を含む。	V	褐色土	締まりあり 粘性なし 5 cm大の円礫と粗砂を含む。
VI	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	5 cm大の円礫を多く含む。	VI	暗褐色土	締まりあり 粘性なし
i	黄色砂礫				VII	明褐色土	締まりあり 粘性なし 黄色砂礫層の崩壊土を含む。

SX3				SX8			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし	黒ボク	I	黒褐色土	締まりあり 粘性なし 0.5 cm大の円礫を含む。
II	赤褐色土	締まりあり	粘性なし	火山灰土二次堆積	II	暗褐色土	締まりあり 粘性なし 1～3 cm大の円礫を含む。
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	0.5～1 cm大の円礫を含む。	III	褐色土	締まりややあり 粘性なし 黄色砂礫混じり。
IV	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	1～3 cm大の円礫を含む。	IV	褐色土	締まりややあり 粘性なし 1 cm大の円礫を含む。
V	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	15 cm大以下の円礫を含む。	V	橙色土	締まりあり 粘性ややあり 5～10 cm大の円礫を含む。
VI	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	火山灰土混じり。			
VII	褐色土	締まりややあり	粘性なし	褐色粗砂混じり。5 cm大の円礫を稀に含む。			
VIII	暗褐色土	締まりややあり	粘性なし	粗砂を上位に多く含み、5 cm大の円礫を稀に含む。			

SX4				SX9			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし		I	黒褐色土	締まりあり 粘性なし
II	赤褐色土	締まりあり	粘性なし	火山灰土二次堆積	II	暗褐色土	締まりあり 粘性なし 粗砂と2 cm大の円礫を含む。
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	15 cm大の円礫を含む。	III	褐色土	締まりややあり 粘性なし 2 cm大の円礫を含む。
IV	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	5 cm大の円礫を含む。	IV	褐色土	締まりややあり 粘性なし 2 cm大の円礫を含む。
V	褐色砂	締まりあり	粘性なし	粗砂粒	V	暗褐色土	締まりややあり 粘性なし 2 cm大の円礫を含む。
VI	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	5～10 cm大の円礫を多く含む。	VI	橙色土	締まりややあり 粘性ややあり 5～10 cm大の円礫を含む。

SX5			
番号	層名	観察内容	
I	褐色土	締まりあり	粘性なし 2～3 cm大の円礫を稀に含む。
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 火山灰土が混じる。
III	橙色土	締まりあり	粘性ややあり 側、底部で10～15 cm大の円礫が多い。
IV	暗褐色土	締まりあり	粘性ややあり 黄色砂礫崩壊土混入。粗砂混入。

I 区 SX10～SX16層序

SX10				SX13			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし	X	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
II	黄色土	締まりあり	粘性なし	XI	灰褐色土	締まりあり	粘性ややあり 3cm大の円礫を多く含む。
III	暗褐色土	締まりややあり	粘性なし	XII	暗灰褐色土	締まりあり	粘性なし 5cm大の円礫を含む。
IV	黒色土	締まりあり	粘性なし	XIII	褐色土	締まりあり	粘性なし 10cm大の円礫を稀に含む。粗砂を含む。
V	黒褐色土	締まりややあり	粘性なし	XIV	黒褐色土	締まりあり	粘性ややあり 黄色土をブロックで、黒ボク、火山灰土を含む。
VI	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	i	灰褐色土	締まりあり	粘性ややあり 3cm大の円礫を多く含む。
VII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり				
VIII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり				
IX	灰褐色土	締まりややあり	粘性なし				
X	暗褐色土	締まりややあり	粘性なし				

SX11				SX14			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク混じり。
II	褐色土	締まりあり	粘性なし	II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 5cm大の円礫を含む。
III	褐色土	締まりあり	粘性なし	III	明褐色土	締まりあり	粘性なし 粗砂、10cm大の円礫を含む。
IV	灰褐色土	締まりややあり	粘性なし	IV	褐色土	締まりあり	粘性なし 10cm大の円礫を多く含む。
V	褐色土	締まりあり	粘性なし	V	黄色土	締まりあり	粘性ややあり 粗砂、5～10cm大の円礫を多く含む。
VI	黄色土	締まりあり	粘性ややあり	VI	褐色土	締まりあり	粘性なし 粗砂、5～10cm大の円礫を多く含む。
				VII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 5cm大の円礫を含む。

SX12				SX15			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし	I	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク、火山灰土混じり。
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 10cm大の円礫を含む。
III	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	III	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 10～15cm大の円礫と下位で粗砂を含む。
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 5cm大の円礫を含む。
V	橙色	締まりあり	粘性ややあり	V	灰褐色土	締まりややあり	粘性なし 粗砂、5cm大の円礫を含む。
VI	褐色土	締まりあり	粘性なし	VI	黄色砂礫	締まりなし	粘性なし 1～3cm大の円礫を多く含む。
VII	褐色土	締まりあり	粘性なし	VII	黄色砂礫	締まりなし	粘性なし 小礫、粗砂、30cm大の円礫を含む。
VIII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	VIII	暗灰色砂礫	締まりなし	粘性なし 10～15cm大の円礫を含む。
				IX	黒褐色土	締まりややあり	粘性なし 5cm大の円礫を多く含む。
				X	黒色土	締まりややあり	粘性なし 10cm大の円礫を多く含む。
				XI	黒褐色土	締まりややあり	粘性なし 20cm大の円礫を含む。

SX13				SX16			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりなし	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク混り。
II	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	II	褐色土	締まりあり	粘性なし 1～3cm大の円礫を少量含む。
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 4cm大の円礫と1cm大の小礫を多く含む。
IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 10cm大の円礫を多量に含む。
V	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	V	明褐色土	締まりあり	粘性あり 5～10cm大の円礫と小礫を多量に含む。
VI	褐色土	締まりあり	粘性なし	VI	黄色土	締まりあり	粘性なし 5～10cm大の円礫と小礫を多量に含む。
VII	褐色土	締まりなし	粘性ややあり	VII	明褐色土	締まりあり	粘性ややあり 5～10cm大の円礫と小礫を多量に含む。
VIII	黄色土	締まりあり	粘性ややあり	VIII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 小礫を多く含む。5cm大の円礫を含む。
IX	黄色土	締まりあり	粘性ややあり	IX	褐色土	締まりあり	粘性なし 小礫を多く含む。6cm大の円礫を含む。

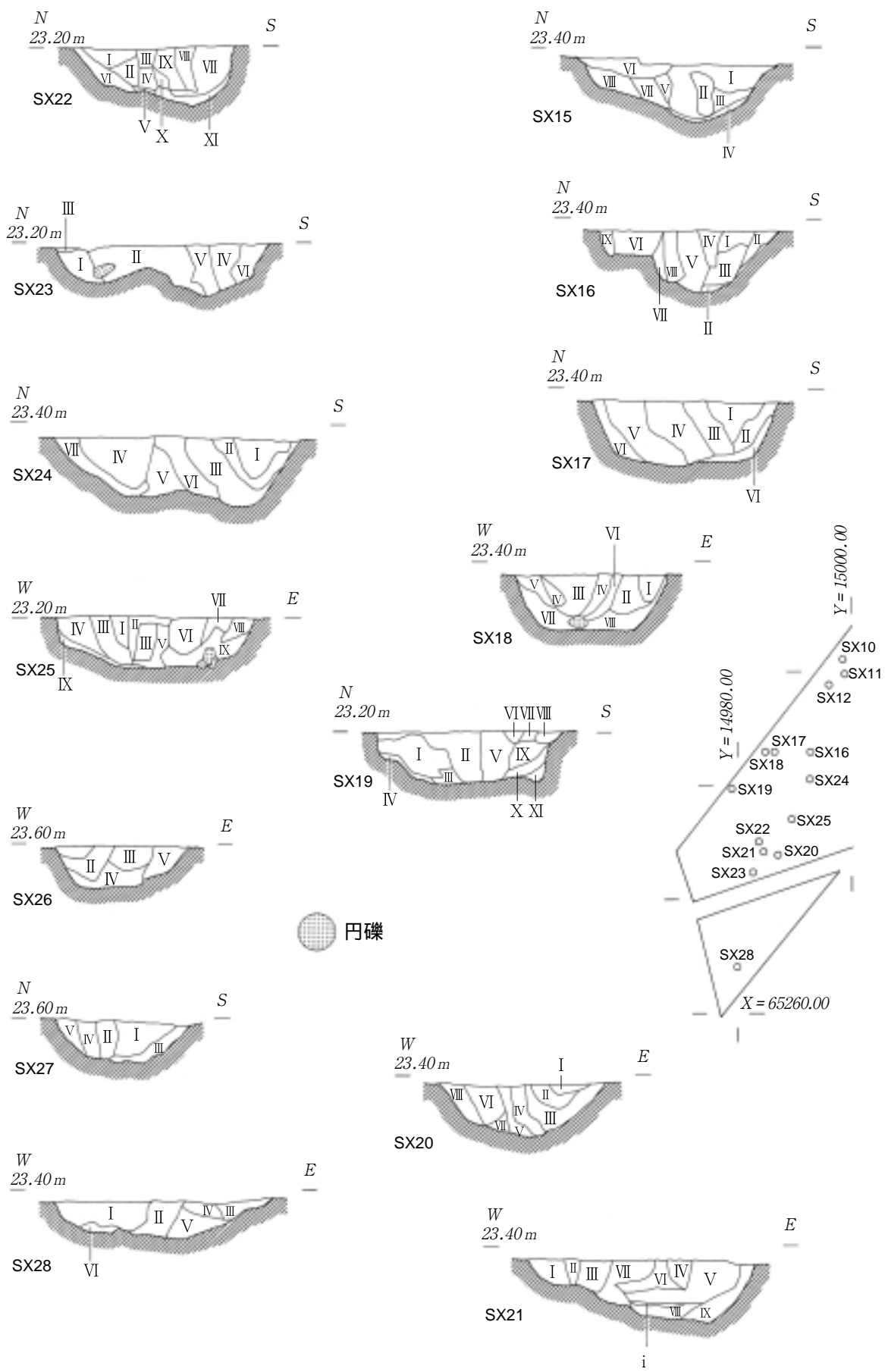
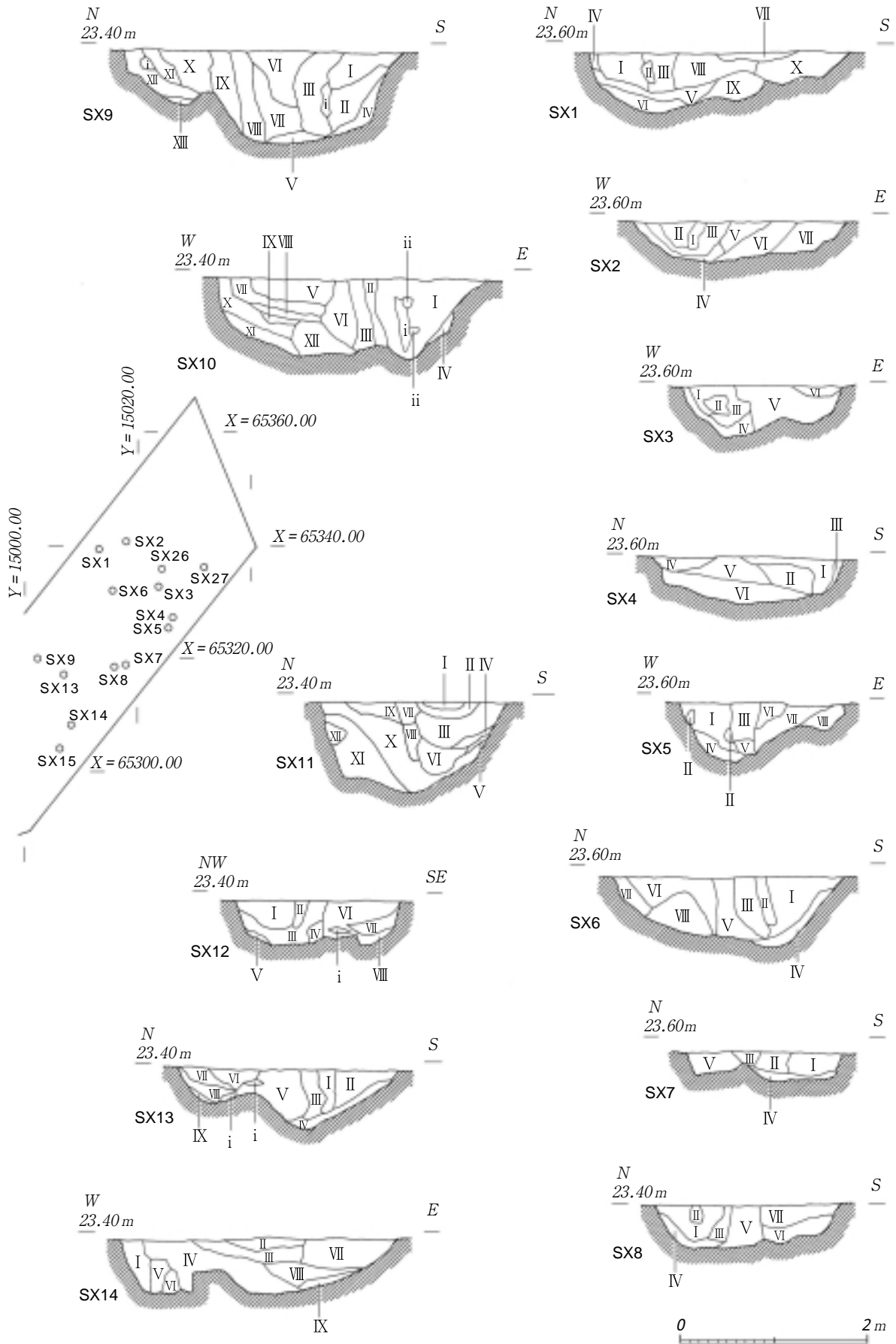


fig.18 調査Ⅱ区 SX位置図・セクション図



II区 SX1~SX8層序

SX1				SX5			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	II	橙褐色土	締まりあり	粘性なし
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	V	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
VI	褐色土	締まりあり	粘性なし	VI	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
VII	灰褐色土礫混	締まりなし	粘性なし	VII	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
VIII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	VIII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	黄色砂礫	締まりあり	粘性なし				
X	暗褐色土	締まりあり	粘性なし				

SX2				SX6			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	褐色土	締まりあり	粘性なし	II	黄褐色土	締まりあり	粘性なし
III	褐色土	締まりあり	粘性なし	III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黄灰色砂礫	締まりあり	粘性なし	V	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
VI	黄灰色砂礫	締まりあり	粘性なし	VI	褐色土	締まりあり	粘性ややあり
VII	暗灰褐色土	締まりあり	粘性なし	VII	褐色土	締まりあり	粘性なし
				VIII	黄色砂礫	締まりややあり	粘性なし

SX3				SX7			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
III	褐色土	締まりあり	粘性なし	III	褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黄色土砂礫混	締まりあり	粘性ややあり	V	褐色土	締まりあり	粘性なし
VI	褐色土礫混	締まりあり	粘性ややあり				

SX4				SX8			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	II	黄褐色土	締まりあり	粘性なし
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	V	橙色土砂礫混	締まりあり	粘性ややあり
VI	黄色砂礫	締まりあり	粘性なし	VI	橙色土	締まりあり	粘性ややあり
				VII	黒褐色土	締まりあり	粘性なし

II区 SX9～SX14層序

SX9				SX12			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	II	褐色土	締まりあり	粘性なし
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	V	黄褐色土	締まりあり	粘性なし
VI	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	VI	黄色土混	締まりあり	粘性ややあり
VII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	VII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
VIII	黄色土	締まりあり	粘性なし	VIII	褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	灰色砂	締まりややあり	粘性なし	i	褐色土	締まりあり	粘性ややあり
X	黄色土	締まりあり	粘性なし				
XI	黒褐色土	締まりあり	粘性なし				
XII	褐色土	締まりあり	粘性なし				
XIII	黄褐色土	締まりあり	粘性なし				
i	黄褐色土	締まりあり	粘性なし				

SX10				SX13			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黄褐色土	締まりあり	粘性なし
II	褐色土	締まりあり	粘性なし	II	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
III	橙色土	締まりあり	粘性なし	III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
V	黄灰色土	締まりあり	粘性なし	V	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
VI	橙色土混	締まりあり	粘性ややあり	VI	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
VII	黒色土	締まりあり	粘性なし	VII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
VIII	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	VIII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	灰褐色砂	締まりややあり	粘性なし	IX	褐色土	締まりあり	粘性ややあり
X	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	i	褐色土	締まりあり	粘性ややあり
XI	暗黄褐色土	締まりあり	粘性なし				
XII	灰褐色砂	締まりややあり	粘性なし				
i	黄褐色土	締まりあり	粘性なし				
ii	黒色土	締まりあり	粘性なし				

SX11				SX14			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし	I	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
II	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	II	黄色土	締まりあり	粘性なし
III	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	III	褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	橙色土	締まりあり	粘性なし
V	褐色土	締まりあり	粘性なし	V	橙色土	締まりあり	粘性なし
VI	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	VI	橙色土	締まりあり	粘性なし
VII	褐色土	締まりあり	粘性なし	VII	茶褐色土	締まりあり	粘性なし
VIII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	VIII	褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	IX	黄褐色土	締まりあり	粘性ややあり
X	橙色土	締まりあり	粘性ややあり				
XI	黄色土	締まりあり	粘性なし				
XII	黄灰色砂	締まりあり	粘性なし				

II区 SX15～SX21層序

SX15				SX19			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
II	黄褐色土	締まりあり	粘性なし	II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
III	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	III	黄色土礫混	締まりなし	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
V	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	V	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
VI	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	VI	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
VII	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	VII	茶褐色土	締まりあり	粘性ややあり
VIII	暗褐色土	堅緻	粘性なし	VIII	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
				IX	明褐色土	締まりあり	粘性なし
				X	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
				XI	褐色土	締まりあり	粘性なし

SX16				SX20			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	黄褐色土	締まりなし	粘性なし
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	茶褐色土	締まりあり	粘性なし
V	褐色土	締まりあり	粘性なし	V	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
VI	黄灰色土	締まりあり	粘性ややあり	VI	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
VII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	VII	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
VIII	橙色土	締まりあり	粘性ややあり	VIII	黄褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	橙色土	締まりあり	粘性なし				

SX17				SX21			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし	I	黒色土	締まりあり	粘性なし
II	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	II	茶褐色土	締まりあり	粘性なし
III	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	III	黒褐色土	締まりなし	粘性なし
IV	橙色土礫混	締まりあり	粘性あり	IV	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
V	黄褐色土 砂礫混	締まりあり	粘性なし	V	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり
VI	黄色土礫混	締まりあり	粘性あり	VI	黄色土	締まりあり	粘性ややあり
				VII	褐色土	締まりあり	粘性なし
				VIII	褐色土礫混	締まりあり	粘性なし
				IX	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
				i	黄色土	締まりあり	粘性ややあり

SX18			
番号	層名	観察内容	
I	黒色土	締まりあり	粘性なし
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
III	黄色土礫混	締まりなし	粘性なし
IV	橙色土礫混	締まりあり	粘性あり
V	暗褐色土礫混	締まりあり	粘性なし
VI	褐色土礫混	締まりあり	粘性なし
VII	黄褐色土礫混	締まりあり	粘性なし
VIII	灰褐色土礫混	締まりあり	粘性なし

II区 SX22～SX28層序

SX22				SX26			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク混じり。
II	黄色土	締まりあり	粘性ややあり	II	褐色土	締まりあり	粘性なし
III	黄褐色土	締まりなし	粘性なし	III	黄色土砂礫混	締まりあり	粘性なし 粗砂、3cm大の円礫を多く含む。5cm大の円礫を稀に含む。
IV	黄褐色土	締まりあり	粘性ややあり	IV	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 5～10cm大の円礫を稀に含む。
V	褐色土	締まりあり	粘性ややあり	V	暗褐色土	堅緻	粘性なし 20cm大の円礫を含む。
VI	褐色土	締まりあり	粘性なし				
VII	黒褐色土	締まりあり	粘性なし				
VIII	茶褐色土	締まりあり	粘性なし				
IX	褐色土	締まりあり	粘性なし				
X	褐色土	締まりあり	粘性なし				
XI	暗褐色土	締まりあり	粘性なし				

SX23				SX27			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	褐色土	締まりあり	粘性ややあり	I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク混じり。
II	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	II	明褐色土	締まりあり	粘性なし
III	黄色土	締まりなし	粘性ややあり	III	褐色土	締まりあり	粘性なし 3cm大の円礫を含む。
IV	褐色土	締まりあり	粘性なし	IV	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり 10cm大の円礫を含む。
V	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	V	橙色土	締まりあり	粘性なし 粗砂、5cm大の円礫を含む。
VI	黒褐色土	締まりあり	粘性なし				

SX24				SX28			
番号	層名	観察内容		番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし	I	暗褐色土	締まりあり	粘性なし
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし	II	橙色土	締まりあり	粘性ややあり
III	暗褐色土	締まりなし	粘性なし	III	黒褐色土	締まりあり	粘性なし
IV	橙色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	IV	黒褐色土礫混	締まりあり	粘性ややあり 5～10cm大の円礫を含む。
V	黄色土礫混	締まりあり	粘性ややあり	V	橙色土砂礫混	締まりあり	粘性なし
VI	黄褐色土	締まりあり	粘性ややあり	VI	褐色土	締まりあり	粘性なし
VII	暗褐色土	締まりあり	粘性ややあり				

SX25			
番号	層名	観察内容	
I	黒褐色土	締まりあり	粘性なし 黒ボク混じり。
II	暗褐色土	締まりあり	粘性なし 粗砂を少量含む。
III	暗褐色土	締まりなし	粘性なし 中央部分に火山灰土をブロックで含む。
IV	灰褐色土	締まりややあり	粘性なし
V	灰褐色土	締まりあり	粘性なし 粗砂と0.5cm大の礫を稀に含む。3～5cm大の円礫を含む。
VI	黄色土礫混	締まりあり	粘性あり 粗砂、0.5～1cm大の礫を多く含む。
VII	褐色土	締まりあり	粘性なし 1～2cm大の礫を稀に含む。
VIII	褐色土	締まりあり	粘性なし
IX	黄色土	締まりあり	粘性あり 1～2cm大の礫を稀に含む。部分的に20cm大の円礫を含む。

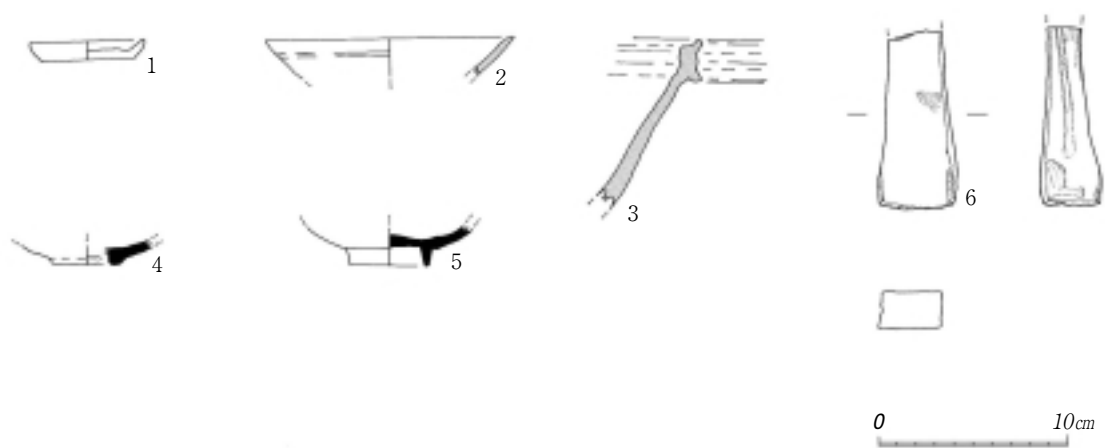


fig.19 边路石南遺跡 出土遺物実測図

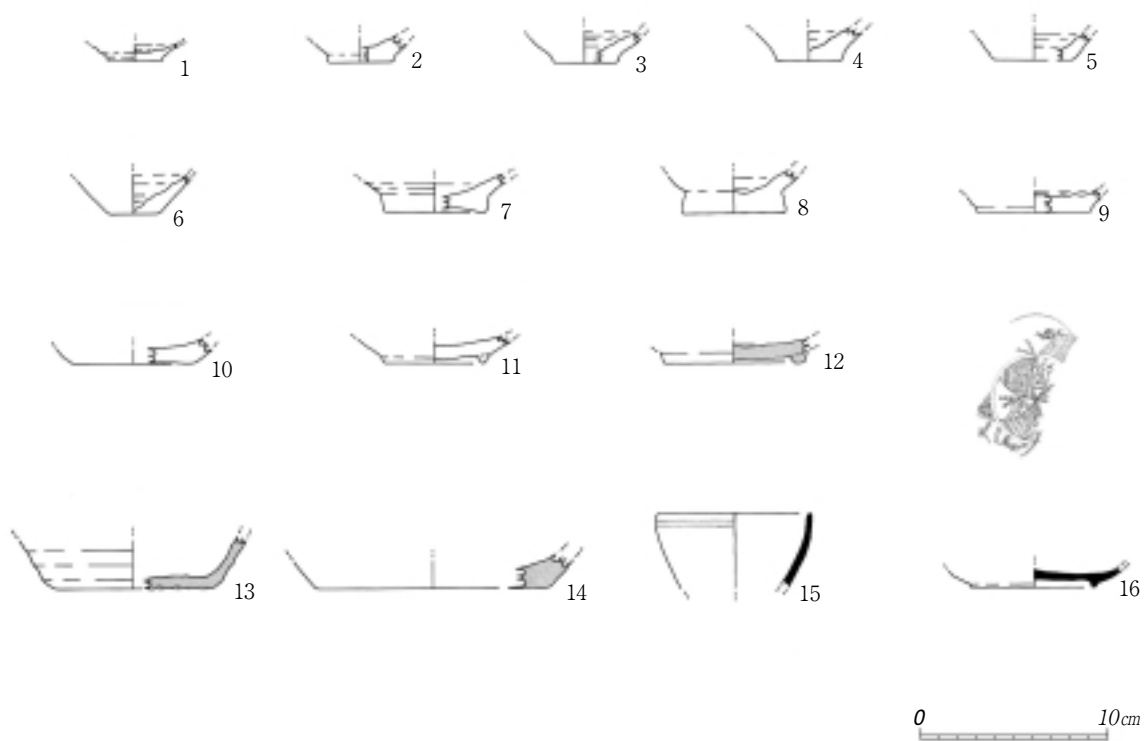


fig.20 五反地遺跡 出土遺物実測図

辺路石南遺跡遺物観察表 (fig.19・pl.8)

no.	出土地点	器種	器形	法量 (cm)			特徴・調整		胎土・焼成	その他
				口径	底径	器高 (残存高)	内面	外面		
1	SK1	土師器	小皿 (灯明皿)	6.0	5.0	1.0	ナデ。口縁部に煤が3カ所付着する。	底部に糸切り痕を残す。	やや疎	
2	SD1	陶器	皿	13.0		2.1	灰釉。緑釉による文様を施す。(文様主体は不明。)	灰釉	乳白色を呈し、剥離面は荒い。	
3	SB2	陶器	播鉢			9.1	8~9条単位の播目が下から上に施される。口縁部は強いナデにより凹線状を成す。	口縁の段部は断面V字の2条の溝を成す。	一部はガラス化。粒子単位は小さく、剥離面はやや荒い。円孔が見られる。	口縁の内外面に褐釉を施す。
4	SK5	磁器	小皿		3.5	0.9	呉須による文様を施す。	畳付けは釉剥ぎを施し、高台内側に砂粒が熔着する。	透明感を持ち、剥離面はやや荒い。	肥前
5	SK5	磁器	碗		4.2	2.0	透明釉	青磁釉で貫入が見られる。高台はやや高く内側が深く削り込まれる。畳付けは平らな面を成す。	ガラス化良好、剥離面はやや荒い。円孔の規模は小さい。	肥前 高台高0.9cm
6	SK1	砥石	仕上げ砥	残存長 9.5	幅 4.1	厚さ 3.2	使用面は表裏2面と両側面2面。主面には斜位の擦痕が見られる。側面の一つには縦位に深い溝条の研痕が残される。長軸方向の断面は凹状を呈す。			泥質凝灰岩

五反地遺跡遺物観察表 (fig.20・pl.8)

no.	出土地点	器種	器形	法量 (cm)			特徴・調整		胎土・焼成	その他
				口径	底径	器高 (残存高)	内面	外面		
1	I区 SD1	土師器	小皿		2.9	0.9	ロクロ目を残す。	底部に糸切り痕。	密	
2	表採	土師器	坏		3.4	1.0			やや疎・やや不良	
3	表採	土師器	坏		3.4	1.3	ロクロ目を残す。	底部に糸切り痕を残す。	密	
4	表採	土師器	坏		3.4	1.5	ロクロ目を残す。	底部に糸切り痕を残す。	密・良好	
5	表採	土師器	小皿		4.2	1.2	ロクロ目を残す。		密	
6	表採	土師器	坏		2.5	1.8	ロクロ目を残す。		やや疎	
7	表採	土師器	坏		5.4	1.6	ロクロ目を残す。	底部は円盤状を呈す。	密・やや不良	
8	I区 SD1	土師器	坏		5.4	2.0	ロクロ目を残す。	底部は円盤状を呈し、糸切り痕を残す。		
9	表採	土師器	坏 (小皿)		6.0	0.8	ロクロ目を残す。		やや疎・やや不良	
10	表採	土師器	壺?		6.5	0.8	ナデ	ナデ	石英粒0.2~0.3cmを含む。	
11	表採	土師器	碗		5.2	1.2	ナデ	ナデ。高台は貼付により断面逆台形を呈す。	不良	高台高0.3cm
12	表採	須恵器	有台坏身		7.4	1.3	ナデ	高台は貼付され逆台形を呈す。高台基部の内側に強いナデが施され窪む。	やや疎、0.2cm大の砂岩角礫を含む。・やや不良	高台高0.4cm
13	表採	須恵器	坏		4.3	2.6	ナデ	ナデ。底部に粘土紐単位を留める。		
14	表採	陶器	播鉢		12.2	1.5	4条単位の播目が下から上に施される。	ナデ	赤褐色、石英粒0.1~0.3cmを含む。	
15	表採	磁器	碗 (丸形)	8.0		4.0	口縁部に露胎部が存在。	口縁部に二重圈線。	透明感を持ち、剥離面はやや荒い。	肥前系
16	表採	磁器	皿		6.4	0.9	円紋を用い、松竹梅を呉須で描く。型紙刷り。			高台高0.3cm

まとめ

あけぼの道路敷設に係わる調査では長岡台地上の各遺跡から多くの倒木痕跡が検出されている。環境の項で述べたように倒木痕跡の存在は植生の遷移として極相または極相に準ずる森林的な環境があったことを示すものであろう。但し、そこには草原的な環境が存在したことを示す黒色土が埋積されており、この遷移の後退は人為的な影響による可能性が強い。つまり、黒色土を含んだ倒木痕跡はこれらが森林後退に伴う時期、人為的な開発（森林破壊）の開始された時期に発生したものと考えられる。今回のあけぼの道路敷設に係わる一連の調査で黒色土が形成され始めた時期の遺構は発見されていないが、長岡台地上、もう少し範囲を広げて中・上位の段丘上でも草原的な環境を示唆する痕跡があれば、遺構と組み合わせてこのような痕跡の精査が必要と考えられる。

今回の調査で検出された道路遺構は路線全体の一部分と考えられ、道路として機能した時期を明確にできる様な遺構の存在は無く、また遺物の存在も僅少である。多分に推測の域から述べざるを得ないが、道路遺構に残された轍の跡は、この道が人だけでなく物の流通をも係わる道であったことを示唆するものである。また、路面の一部に見られる凹面は技術的には道路の内部構造と考えられるもので、波板状凹凸面と呼ばれるもの乃至は同じ目的の構造物と考えられる。これらの痕跡から推してある程度道路自体の重要性を窺う事ができる。環境の項で上げた様にこれは直線的に設けられたと考えられる路線の延長線上に存在する各遺跡に係わるものであろう。長岡台地の北西側に存在する国衙や国分寺などの遺跡群とそれらが存在するに至った背景と考えられる古墳や古墳群が見下ろす国府域。更に道は比較的安定した山沿いを通り西側の地域に繋がりもっていたものであろう。また、台地東側の平野部に存在したと考えられる大領遺跡と周辺の地域は、物部川の河道に近接する位置を占めることで人や物の流通に係わる場所ではなかったであろうか。この二つの地域を繋ぐもの延いてはを渡河して物部川東岸の各地へ至るものと考えることができる。

今回検出された道路遺構は形態的に、また規模の面から見ると各地で調査が行われている官道と比べて見劣りせざるを得ない。ただし、自然発生的な道が集落間を結ぶような形で生まれるものであり、香長平野部で言及するならば北部の古墳立地に係わる集落間を結んで存在する様な道とは性格が異なるものと考えられる。

最後に、道自体の存続期間については道路遺構の常で僅少な遺物から断言することは難しいが、路面の形成が一度で終了していることからするとある程度限定されるのではないか。また、これは古代末に生じたとされる気候の冷涼化に伴う物部川河道の変化に際し、流通の拠点を失ったことに起因するものと考えられる。

参考文献

- 足利健亮「山陽・山陰・南海三道と土地計画」『新版 古代の日本』1992年 角川書店
- 高橋 学「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第7集』1996年
- 飯田充晴「道路構築方法について」『古代交通研究 第2号』1993年
- 武部健一『道のはなし I』1992年 技術堂出版
- 『角川日本地名大辞典』1986年 角川書店

圖 版



五反地遺跡全景



五反地遺跡 調査Ⅰ区 完掘状況(北側)

pl. 2



五反地遺跡 調査Ⅱ区 完掘状況（北側）

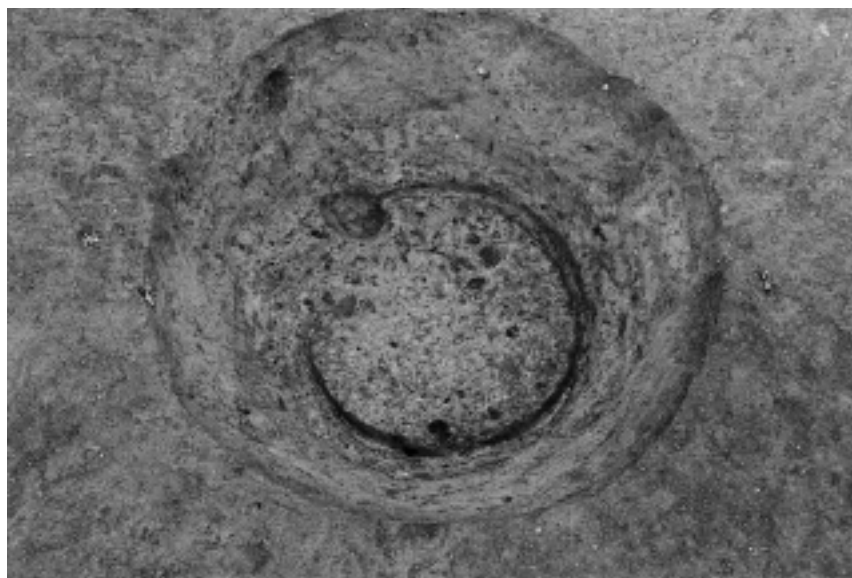


五反地遺跡 調査Ⅱ区 完掘状況（南側）



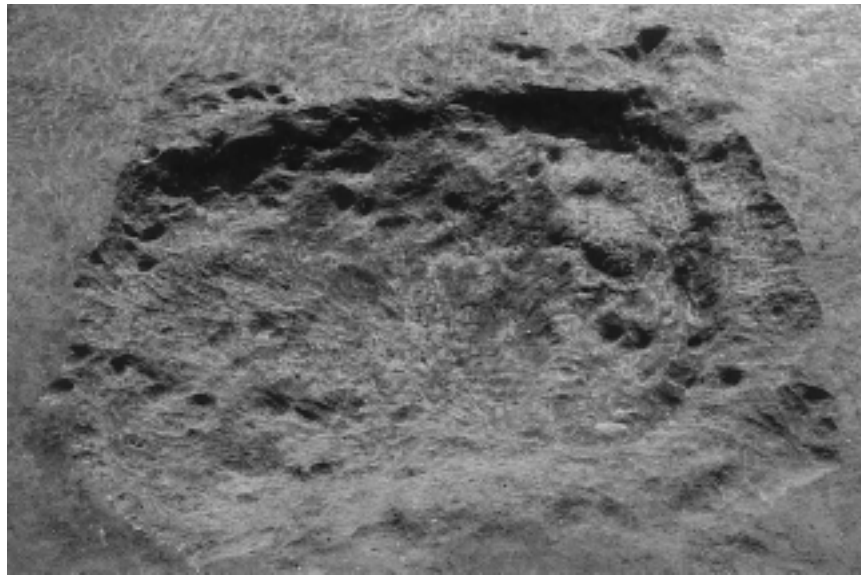
辺路石南遺跡
SB1、SB2他
完掘状況

辺路石南遺跡
SK4
完掘状況



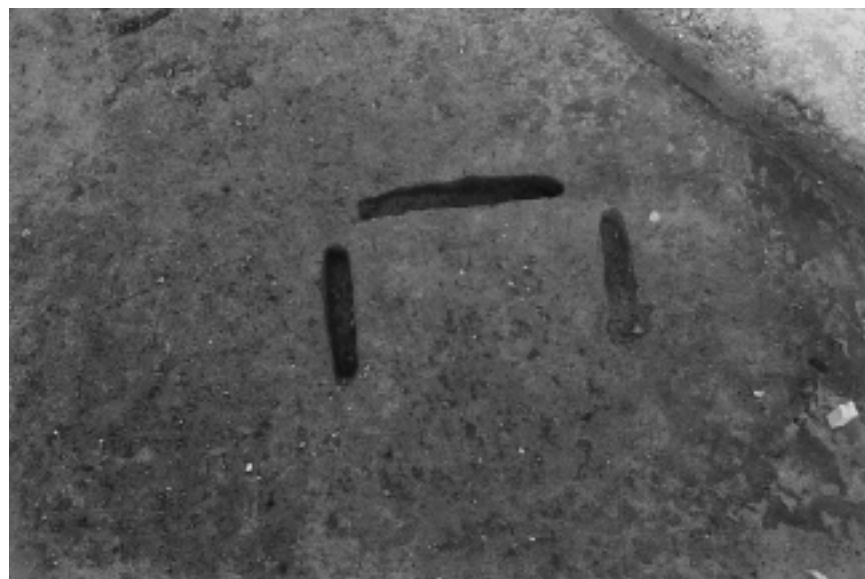
辺路石南遺跡
SK5
完掘状況

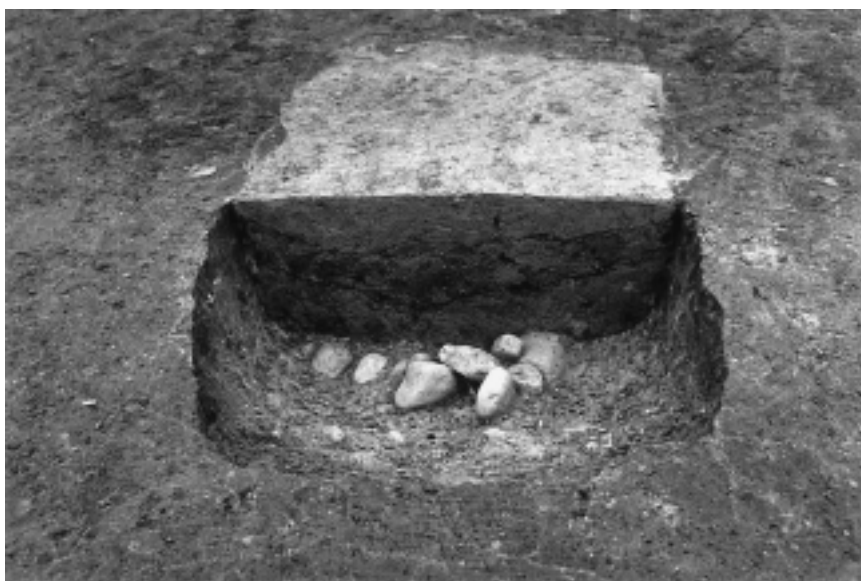
辺路石南遺跡
SK6
完掘状況



辺路石南遺跡
SK7
完掘状況

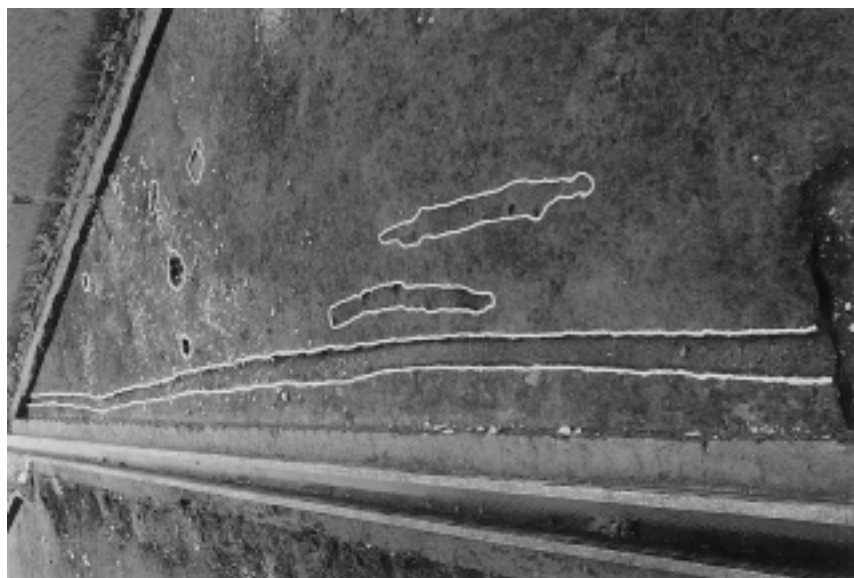
五反地遺跡
調査Ⅰ区 SK2
完掘状況





五反地遺跡
調査Ⅱ区 SK1
半截状況

五反地遺跡
調査Ⅰ区 SD1
完掘状況



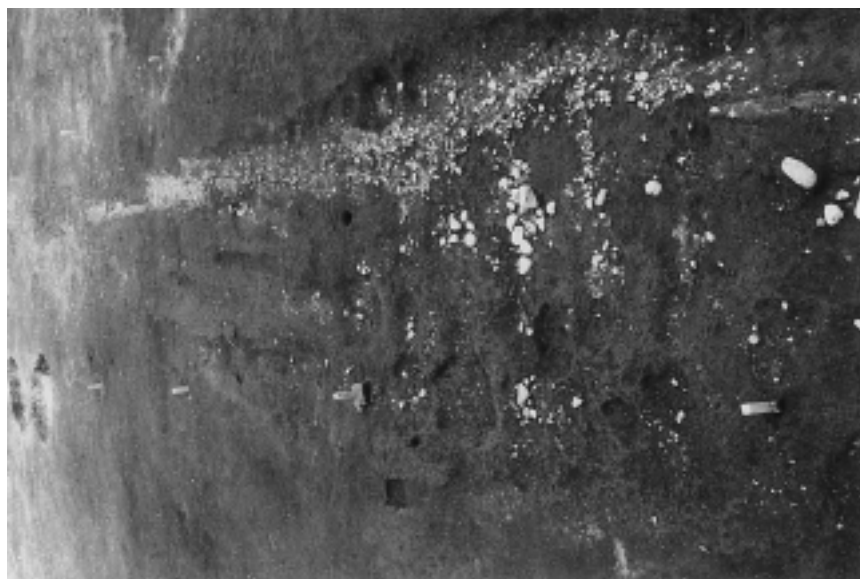
五反地遺跡
調査Ⅱ区 SD1
完掘状況

五反地遺跡
道路遺構 (東から)



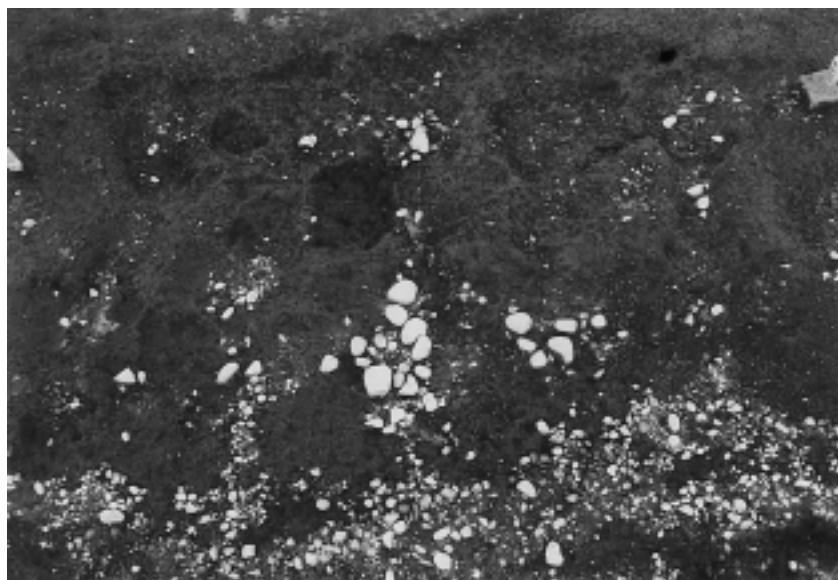
五反地遺跡
道路遺構 (西から)

五反地遺跡
道路遺構 (礎敷)

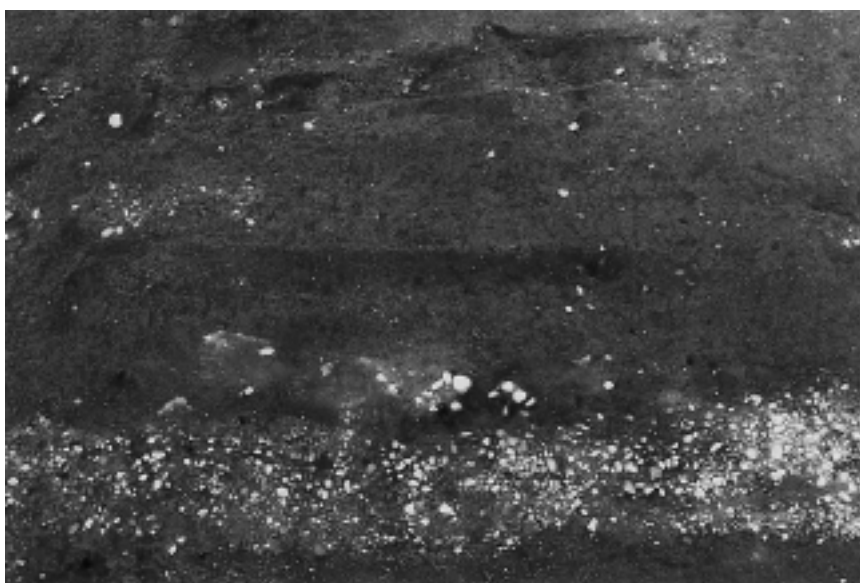




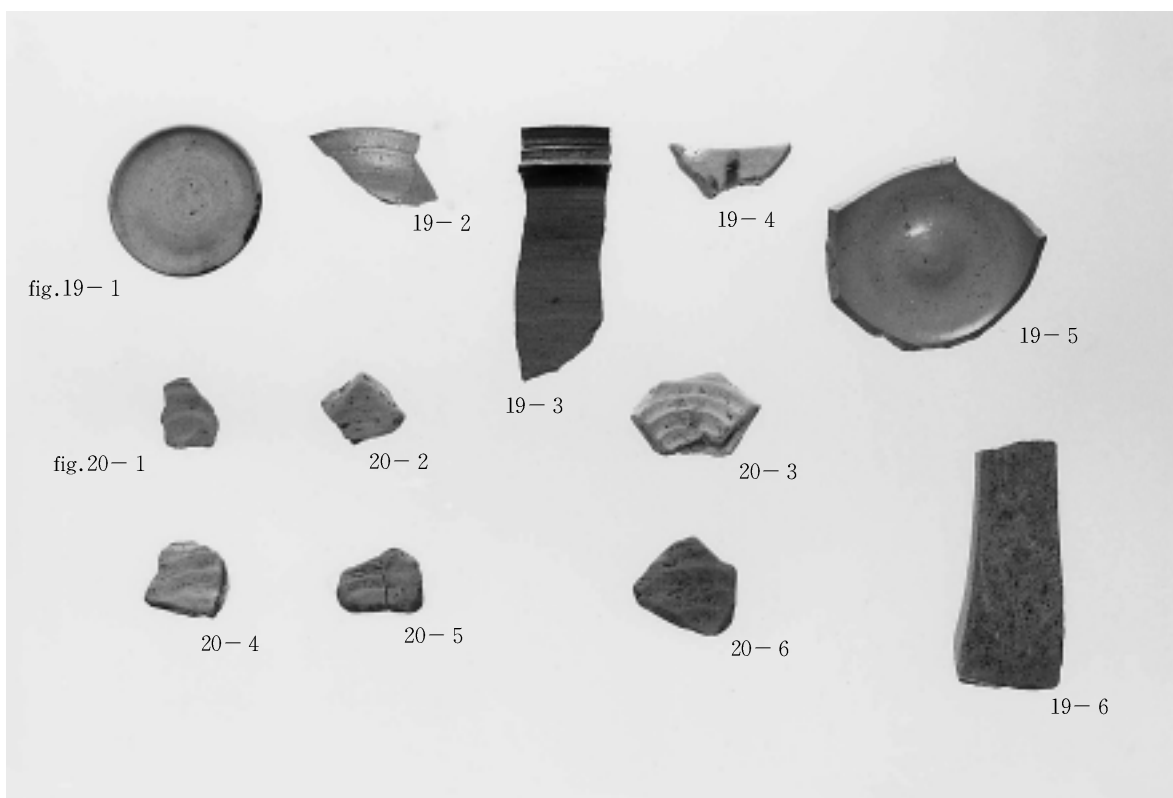
五反地遺跡
道路遺構
(西壁)



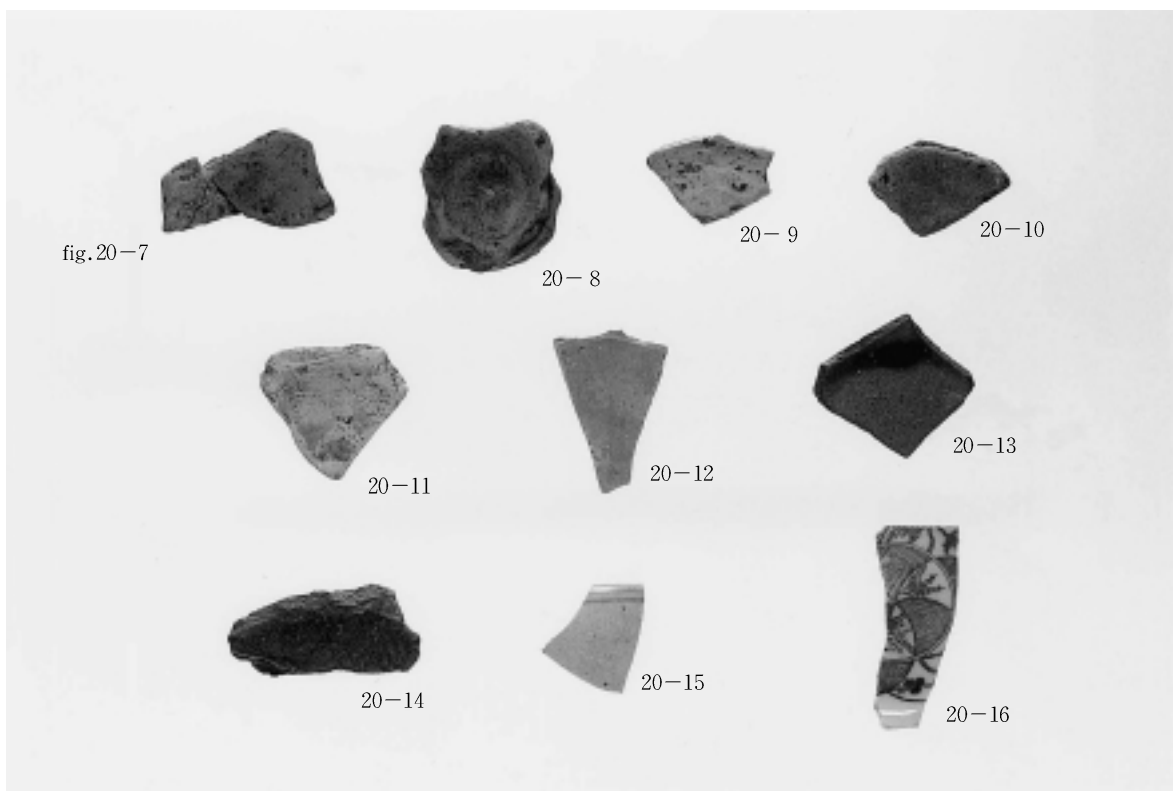
五反地遺跡
道路遺構
(凹凸面)



五反地遺跡
道路遺構
(轍)



辺路石南遺跡・五反地遺跡 出土遺物



五反地遺跡出土遺物



報告書抄録

ふりがな	へんろいしみなみいせき ごたんじいせき							
書名	辺路石南遺跡・五反地遺跡							
副書名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	7							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	佐竹 寛・浜田恵子・藤方正治							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 088-864-0671							
発行年月日	西暦 1999年 9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へんろいしみなみいせき 辺路石南遺跡	なんこくし しもすえまつ 南国市下末松 たかや じし 高屋ノ西449	39204	0163	33度 35分 05秒	133度 39分 03秒	1995年 5月30日～ 6月7日	1,040	あけぼの道 路建設工事 に伴う調査
ごたんじいせき 五反地遺跡	なんこくし かみすえまつ 南国市上末松 あご ごたんじ 字五反地	39204	0161	33度 35分 22秒	133度 39分 44秒	1996年 4月22日～ 8月22日	5,583	あけぼの道 路建設工事 に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
辺路石南遺跡	集落跡	近世	掘立柱建物跡 土坑・土壇 溝	土師器 近世陶磁器		土壇に伴う近世陶磁器		
五反地遺跡	道路跡他	古代 中世 近世	掘立柱建物跡 土坑・土壇 溝 道路跡	土師器 須恵器 近世陶磁器		道路遺構		

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第43集

辺 路 石 南 遺 跡
五 反 地 遺 跡

—あけぼの道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999年9月

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
電話(088)864-0671

印 刷 (有)西村謄写堂
高知県高知市上町1丁目6-4
電話(088)822-0492

